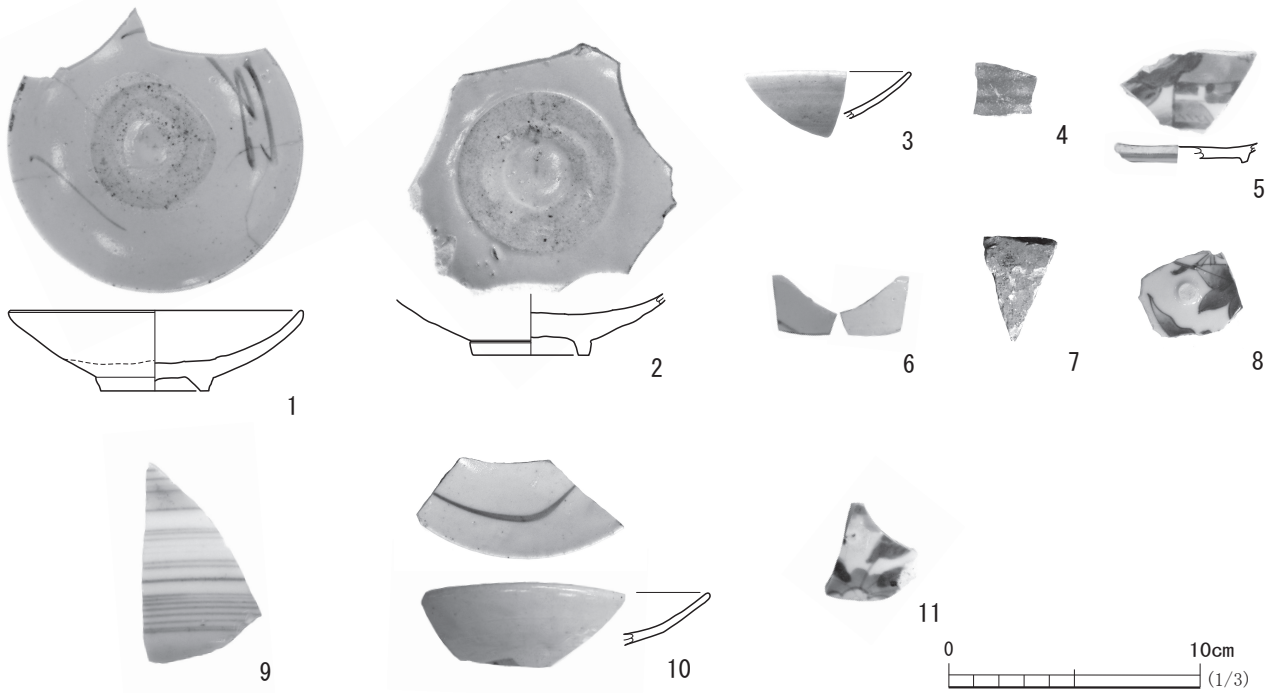


第Ⅲ-25図 出土遺物3

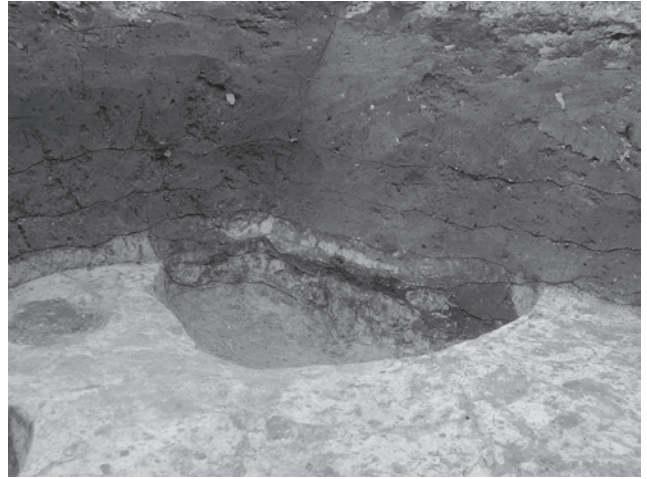


第Ⅲ-26図 出土遺物4

掲載番号	写真番号	登録番号	出土遺構	出土層位	種別	器種	残存	法量(cm)			調整			特徴・備考
								長	幅	厚	外	内	底	
	Ⅲ-14-1	F-1	SD1		瓦	丸瓦	一部	-	-	-				
	Ⅲ-14-2	L-1	SD1		木製品	杭								
	Ⅲ-14-3	L-2	SD1		木製品	杭								
	Ⅲ-14-4	L-6	SD1		木製品	杭								
	Ⅲ-14-5	L-5	SD1		木製品	杭								
	Ⅲ-14-6	L-4	SD1		木製品	杭								
	Ⅲ-14-7	L-3	SD1		木製品	杭								
Ⅲ-24-1		I-1	SD6		陶器	碗	ほぼ完形	10.4	4.2	6.4				小野相馬 灰釉 18C
Ⅲ-24-2		I-2	SD6		陶器	皿	2/5	(12.2)	3.9	3.2				肥前産 17C後半
Ⅲ-24-3		I-3	SD6		陶器	皿	1/8	-	(4.0)	(2.3)				肥前産 17C後半
Ⅲ-24-4		I-4	SD6		陶器	碗	一部	-	-	(6.3)				肥前産 陶胎染付 草花文 18C
Ⅲ-24-5		I-5	SD6		陶器	碗								肥前産 17C後半～18C
Ⅲ-24-6		I-6	SD6		陶器	皿	一部	-	4.4	(1.7)				肥前産(唐津産か) 青緑もしくは緑釉 17世紀後半
Ⅲ-24-7		I-12	SD6		陶器	皿	一部	-	-	-				美濃産 灰釉 菊皿 17C
Ⅲ-24-8		I-11	SD6		陶器	皿	一部	-	-	-				灰釉 古代
Ⅲ-24-10		I-8	SD6	下層	陶器	鉢 <small>少香印</small>	一部	-	-	(1.8)				瀬戸産 灰釉
Ⅲ-24-11		I-9	SD6		瓦質陶器	鉢	一部	-	-	(4.4)				
Ⅲ-24-12		J-6	SD6		磁器	皿	一部	-	-	(2.5)				肥前産 17C後半
Ⅲ-24-13		I-10	SD6	下層	陶器	片口鉢	一部	-	-	(2.5)				山茶碗系 13C
Ⅲ-24-14		I-13	SD6		陶器	鉢	一部	-	-	-				堤 灰釉 18C以降
Ⅲ-24-15		L-7	SD6		漆器	椀	?				黒漆塗	黒漆塗	黒漆塗	底部に赤色漆書「□□」
Ⅲ-24-16		J-2	SD6		磁器	碗	一部	-	-	(5.4)				肥前産 陶胎染付 18C前
Ⅲ-24-17		J-3	SD6		磁器	碗	一部	-	-	(4.1)				肥前産 染付 18C
Ⅲ-24-18		J-4	SD6		磁器	碗	一部	-	-	(4.4)				肥前産染付 18C後半
Ⅲ-25-1		J-5	SD6		磁器	香炉	一部	-	-	-				肥前産 陶胎染付 玉縁口縁 17～18Cか
Ⅲ-25-2		J-7	SD6		磁器	皿	一部	-	-	-				肥前産 染付 角皿 18C以降
Ⅲ-25-3		I-14	SK3		陶器	香炉	一部	-	-	-				美濃産 鉄釉 17C
Ⅲ-25-4		I-15	SK3		陶器	甕(壺)	一部	-	-	-				
Ⅲ-25-5		I-16	SK3		陶器	鉢	一部	-	-	-				在地産 13～14C
Ⅲ-25-6		I-17	SK3		陶器	甕	一部	-	-	-				在地産
Ⅲ-25-7		I-18	SK3		陶器	片口鉢	一部	-	-	-				山茶碗系 13C
Ⅲ-25-8		I-19	SX1		陶器	甕	一部	-	-	-				常滑産
Ⅲ-25-9		I-20	SX1		陶器	甕	一部	-	-	-				在地産 13～14C 漆継ぎ
Ⅲ-25-10		K-1	SK3		石製品	石臼	一部	(29.2)	-	8.3				上部破片 焼けている
Ⅲ-25-11		G-1	SX1		瓦	平瓦	一部	-	-	-				
Ⅲ-25-12		K-2	P51		石製品	砥石								
Ⅲ-26-1		I-21	検出面		陶器	皿	4/5	11.2	4.3	3.2				肥前産
Ⅲ-26-2		I-24	SD6		陶器	皿	一部	-	4.6	(2.5)				肥前産 17C
Ⅲ-26-3		I-25	SD6		陶器	皿	一部	-	-	(2.6)				肥前産 17C後半
Ⅲ-26-4		I-22	検出面		陶器	碗	一部	-	-	-				瀬戸産 鉄釉 17C後半
Ⅲ-26-5		J-9	検出面		磁器	皿	一部	-	-	(0.8)				肥前産 蛇目大高台皿 18C後半～19C前半
Ⅲ-26-6		J-11	検出面		磁器	皿	一部	-	-	-				肥前産 染付 17C後半
Ⅲ-26-7		I-23	検出面		陶器	甕(壺)	一部	-	-	-				常滑産
Ⅲ-26-8		J-12	I層		磁器	蓋	一部	-	-	-				近・現代
Ⅲ-26-9		J-13	I層		磁器	碗	一部	-	-	-				現代
Ⅲ-26-10		J-10	検出面		磁器	碗	一部	-	-	(1.8)				肥前産 染付 17C後半
Ⅲ-26-11		J-1	検出面		磁器	碗	一部	-	-	-				肥前産 染付 18C



1. I区全景（東から）



2. SK1土坑（北東から）



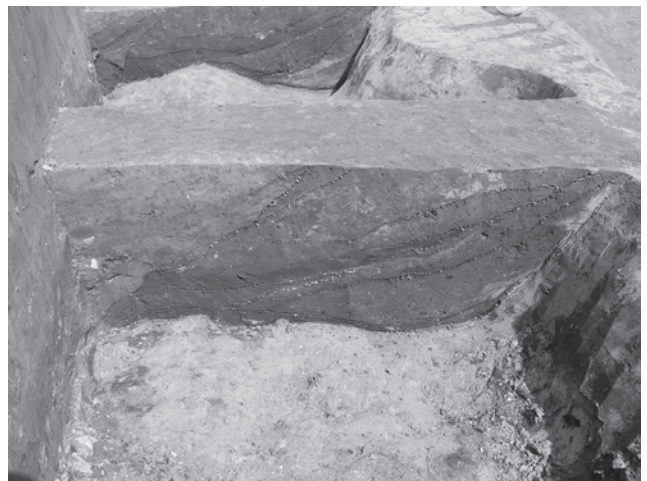
3. I区南壁東半部断面（北東から）



4. II区遺構検出状況（西から）



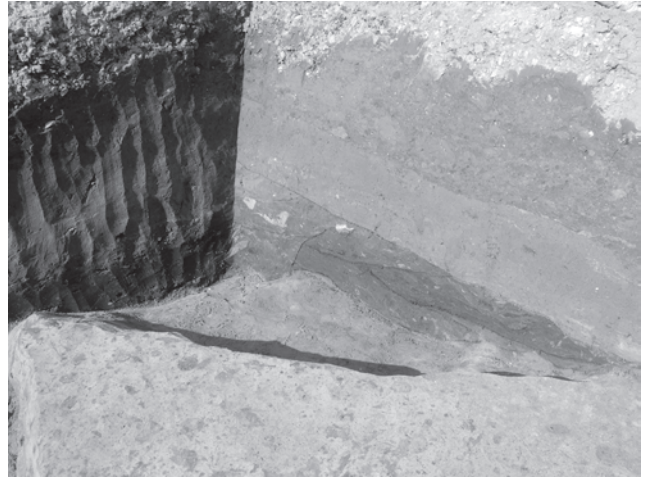
5. II区全景（東から）



6. II区SD3・6, SK3断面（西から）



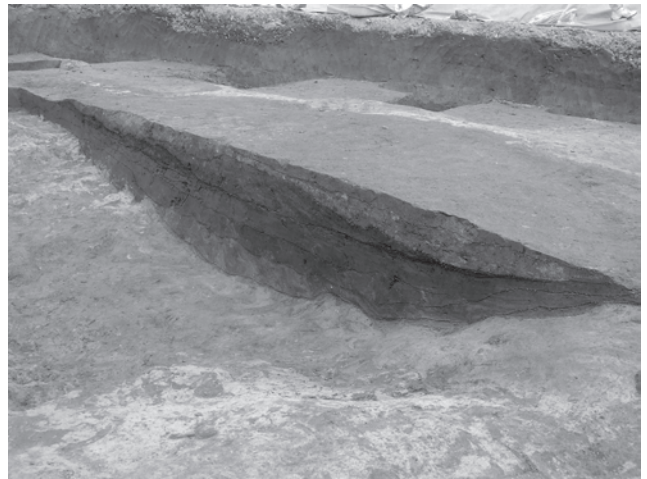
1. II区SD3・6溝跡, SK3土坑東部断面（西から）



2. II区SK2土坑（南西から）



3. II区SK3土坑（西から）



4. II区SX1性格不明遺構断面（南東から）



5. II区東壁断面（西から）



6. III区調査区全景（東から）



1. Ⅲ区SD1・4・5・6・7断面（北東から）



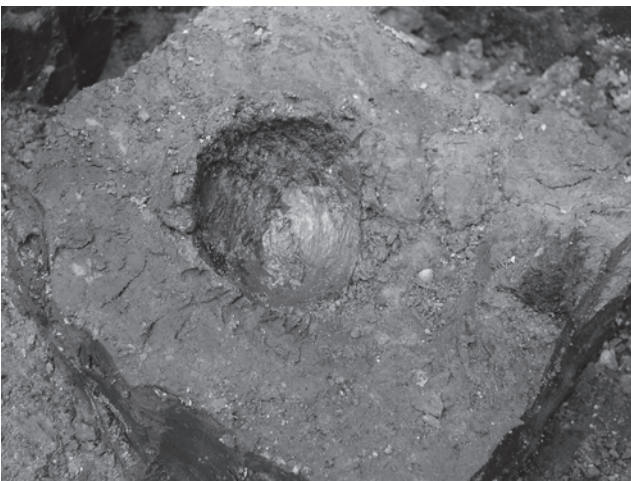
2. Ⅲ区SD1・SD6杭列（南西から）



3. Ⅲ区SD1杭列検出状況（南東から）



4. SD6遺物出土状況（南から）



5. SD6漆器出土状況（南東から）

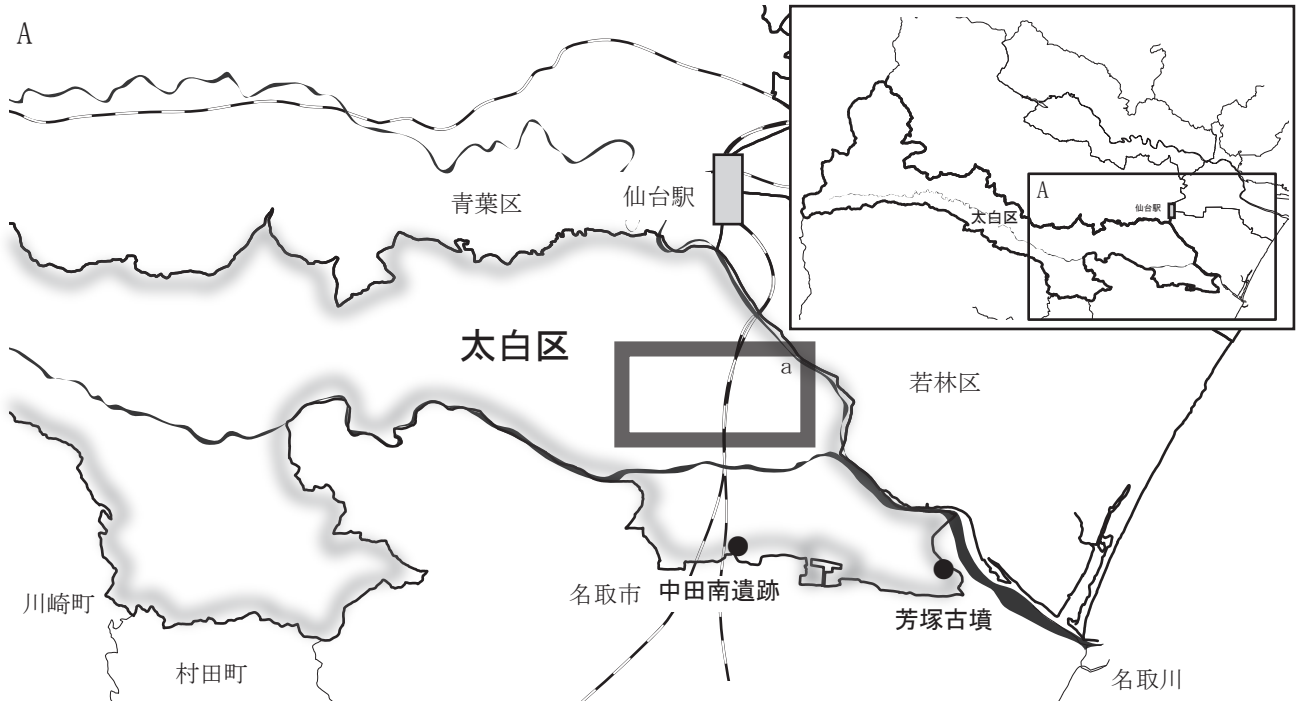


6. Ⅲ区西壁断面（東から）

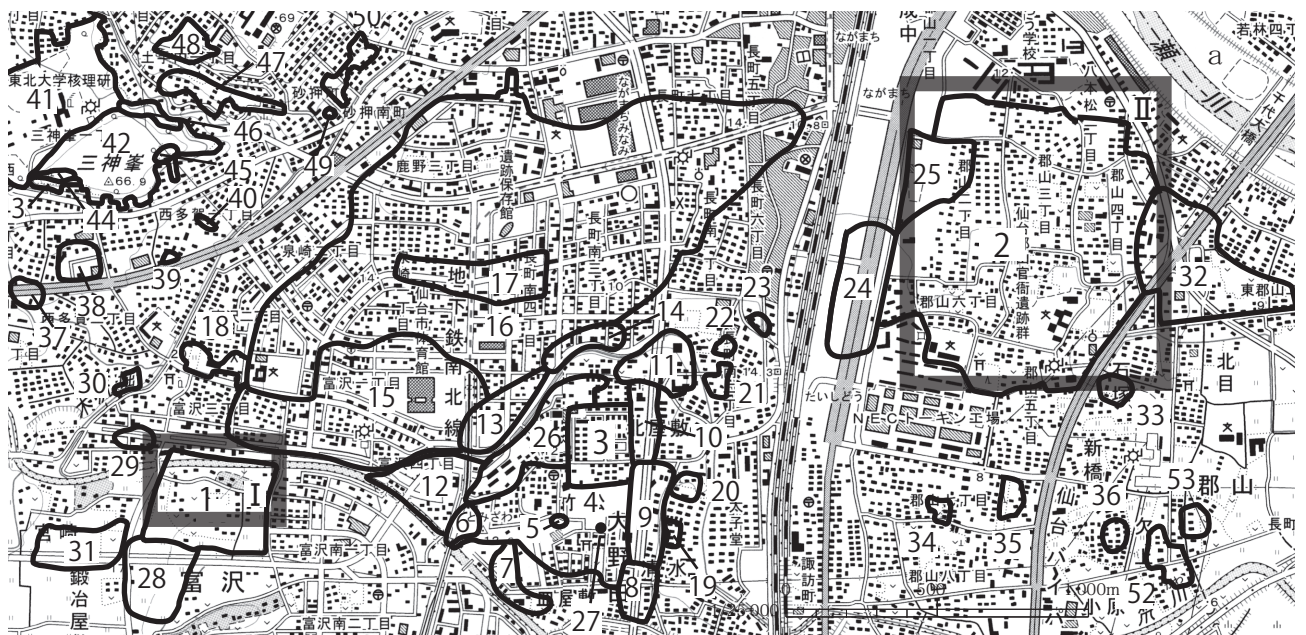
第IV章 太白区内の調査

第1節 概要

本件に係る太白区内で行われた調査は、表IV-1に示すとおりである。太白区内では5遺跡の調査を行っている。第IV-1図のA区域内に所在する芳塚古墳、中田南遺跡、第IV-1図a区域内の大野田遺跡、郡山遺跡、富沢館遺跡である。ここでは、富沢館跡第3次調査、郡山遺跡第224次、第230次、第232次調査について詳細を報告する。



第IV-1図 太白区東部と遺跡位置図の位置



第IV-2図 富沢館遺跡・郡山遺跡と周辺の遺跡

番号	遺跡名	種別	立地	時代	番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	富沢館跡	城館跡	自然堤防	中世	27	鳥居塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳中期
2	郡山遺跡	官衙跡・包含地・寺院跡	自然堤防・後背湿地	縄文～奈良（初期）	28	鍛冶屋敷前遺跡	集落跡	自然堤防	平安
3	大野田官衙遺跡	官衙跡	自然堤防	縄文～中世	29	堀ノ内遺跡	散布地	自然堤防	古墳～古代
4	大野田古墳群	円墳	自然堤防	古墳	30	富沢上ノ台遺跡	散布地	自然堤防	縄文、平安
5	春日社古墳	円墳	自然堤防	古墳中期	31	鍛冶屋敷A遺跡	集落跡	自然堤防	縄文、古代
6	伊古田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文後、古墳～古代	32	北目城跡	城館跡・集落跡・水田跡	自然堤防	縄文後・弥生～近世
7	伊古田B遺跡	散布地	自然堤防	古墳～古代	33	矢来遺跡	散布地	自然堤防	古墳・奈良・平安
8	皿屋敷遺跡	集落跡・屋敷跡	自然堤防	古代～中世	34	的場遺跡	散布地	自然堤防	奈良・平安
9	玉ノ壇遺跡	集落跡・屋敷跡	自然堤防	縄文～中世	35	籠ノ瀬遺跡	散布地	自然堤防	古墳・奈良・平安
10	大野田遺跡	祭祀・集落跡	自然堤防	縄文～古代、近世	36	欠ノ上I遺跡	水田跡	後背湿地	古墳・奈良・平安
11	元袋遺跡	集落跡・水田跡	自然堤防	弥生、古代～近世	37	西台窯跡	窯跡	丘陵麓	古代
12	下ノ内遺跡	集落跡	自然堤防	縄文～奈良	38	原遺跡	散布地	丘陵麓	弥生～古墳、平安
13	下ノ内浦遺跡	集落跡・水田跡	自然堤防	縄文～中世	39	原東遺跡	散布地	丘陵麓	古墳～古代
14	袋東遺跡	散布地	自然堤防	古墳～古代	40	裏町東遺跡	散布地	丘陵麓	平安
15	山口遺跡	集落跡・水田跡	自然堤防・後背湿地	縄文～中世	41	芦ノ口遺跡	集落跡	丘陵	縄文～弥生、平安
16	富沢遺跡	包含地・水田跡	後背湿地	後期旧石器～近世	42	三神峯遺跡	集落跡	丘陵	縄文、平安
17	泉崎浦遺跡	集落跡・水田跡	自然堤防・後背湿地	縄文～古墳、平安、近世	43	富沢窯跡	窯跡	丘陵南斜面	古墳～古代
18	富沢清水遺跡	散布地	自然堤防	古代	44	三神峯古墳群	円墳	丘陵	縄文、平安
19	長町清水遺跡	散布地	自然堤防	古代	45	金山窯跡	窯跡	丘陵南斜面	古墳中
20	北屋敷遺跡	散布地	自然堤防	古代	46	土手内横穴墓群A地点	横穴墓	丘陵斜面	古墳末
21	新田遺跡	散布地	自然堤防	古代	47	土手内横穴墓群B地点	横穴墓	丘陵斜面	古墳末
22	長町南遺跡	散布地	自然堤防	古代	48	土手内遺跡	集落跡	丘陵	縄文～古代
23	長町六丁目遺跡	散布地	自然堤防	古代	49	砂押古墳	円墳	丘陵麓	古墳
24	長町東遺跡	集落跡	自然堤防	弥生～奈良	50	砂押屋敷古墳	散布地	丘陵麓	古代
25	西台畑遺跡	包含地・甕棺墓	自然堤防	縄文～古墳	51	欠ノ上II遺跡	散布地	自然堤防	古墳・奈良・平安
26	六反内遺跡	集落跡	自然堤防	縄文～古代、近世	52	欠ノ上III遺跡	散布地	自然堤防	古墳・奈良・平安

遺跡の位置と周辺の遺跡

表IV-1 太白区内の調査一覧

実施番号	遺跡名	対象面積	調査面積	調査期間	備考	届出等NO.
24-13	富沢館跡	74.12㎡	16.64㎡	5月28日～5月30日	第3次	H24 122-48
24-24	芳塚古墳	121.04㎡	38.50㎡	6月13日～6月14日		H24 122-65
24-29	郡山遺跡	48.75㎡	6.30㎡	6月27日	第224次	H24 122-100
24-46	郡山遺跡	59.50㎡	14.50㎡	9月6日～10日	第230次	H24 122-160
24-50	郡山遺跡	89.32㎡	32.28㎡	9月20日	第232次	H24 122-170
24-53	大野田遺跡	156.71㎡	16.30㎡	10月9日～10月12日		H24 122-186
24-57	中田南遺跡	90.75㎡	37.30㎡	10月10日～10月12日		H24 122-213

第2節 富沢館跡

1 遺跡の概要

富沢館跡は、宮城県仙台市太白区富沢字館、館東、熊ノ前に所在する。JR仙台駅の南西約5.3kmに位置し、名取川とその支流である新笹川に挟まれた標高約16.0mの自然堤防上に立地する。遺跡の範囲は東西約0.4km、南北約0.3kmである。現状は宅地や畑地で、その周囲に水田が広がっている。遺跡の北側を笹川が東流し、笹川に隣接した部分は、河川改修工事によって、地形は原形を留めていない。

周辺の地形を詳細にみると、遺跡の東西と南に広がる水田のうち、標高の高い宅地や畑地に隣接する部分には細長い水田が、それを取り囲むように連続して認められる。周辺の水田から一段高い部分が城館の郭内、細長い水田は堀と推定される。郭内には土塁状の高まりが残存し、現在の水路や道路には城館の地割が反映しているとみられる箇所がある。宅地化や圃場整備が行われたことから、明瞭ではない箇所もあるが、明治時代中期の地籍図とあわせて検討すると、比較的、保存状態が良好な城館といえる。

富沢館跡についての文献には、館の由来や入生田家について記述した寛政4年（1792年）に入生田康行が記した『館記』、江戸時代後期に記された『入生田家之故実』がある。入生田家は仙台藩士で、近世以降、館跡を在郷屋敷として利用した。

『入生田家之故実』には、規模や具体的な年代についての記述はない。堀と土塁について、配置などの記載がある。また、『館記』には仙台藩二代藩主忠宗治政下で、土塁や堀の改変が行われたとある。

城主については、『館記』『入生田家之故実』で北目城主栗野大膳による造営かとある。

一方、『仙台領古城書立之覚』には記載がない。

富沢館跡では、これまで個人住宅建築および共同住宅建設に伴う小規模な調査が5箇所で行われている。調査では、12世紀から13世紀の区画溝跡が検出され、この時期には屋敷地が形成されていることが判明しているが、館跡に伴う遺構は検出されていない。

2 第3次調査

(1) 調査要項

遺跡名: 富沢館跡 (宮城県遺跡登録番号01246) 調査地点: 仙台市太白区富沢字館83番2、83番4の一部

調査期間: 平成24年5月28日～5月30日 調査対象面積: 74.12㎡ 調査面積: 16.6㎡

調査原因: 個人専用住宅建築工事 担当職員: 主事 小泉博明 文化財教諭 伊藤翔太

(2) 調査地点と調査方法

対象地は、富沢館跡の北部に位置する。確認調査は平成24年5月28日に着手した。建築範囲内に東西3.2m、南北5.2mの調査区を設定し、重機を用いて盛土および基本層Ⅰ層を除去して、基本層Ⅱ層上面で遺構検出作業を行った。その結果、溝跡1条、土坑1基、ピット2基を検出した。調査区の埋め戻しは5月30日に行い、今回の調査を終了した。

(3) 基本層序

基本層は、大別3層、細別13層である。Ⅰ層は現在の宅地以前の畑地耕作土などとみられ、宅地化に伴う盛土が含まれる可能性がある。11層に細別される。Ⅱ層はしまりのない均質なにぶい黄褐色の細砂、Ⅲ層はしまりのない黒褐色の礫と細砂の混合層で、いずれも今回の調査における遺構検出面である。なお、今回の調査地点には、層厚約0.25～0.40mの宅地化に伴う盛土がある。

層位	マンセル	土色	土質	備考
I a	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	にぶい黄褐色(10YR5/3)シルトをブロック状に含む。
I b	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	にぶい黄褐色(10YR5/3)シルトを小ブロック状に含む、炭化物を粒状若干含む。
I c	2.5Y4/3	オリーブ褐色	シルト	均質。
I d	10YR3/4	暗褐色	粘土質シルト	円礫と炭化物を少量含む。
I e	10YR3/4	暗褐色	シルト	円礫を若干含む、炭化物を粒状に少量含む。
I f	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	粘土質シルト	炭化物とにぶい黄褐色細砂を粒状にごく少量含む。
I g	2.5Y4/2	暗灰黄色	シルト	礫を少量含む。
I h	2.5YR4/1	黄灰色	粘土質シルト	円礫をやや多く含む。
I j	10YR4/1	褐灰色	粘土	円礫をごく少量含む。
I k	10YR4/3	にぶい黄緑色	粘土質シルト	礫を多く含む。
I i	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	礫をごく少量含む。
Ⅱ	10YR5/4	にぶい黄褐色	細砂	均質。
Ⅲ	2.5Y3/2	黒褐色	円礫・細砂	

(4) 発見遺構と出土遺物

今回の調査では、溝跡1条、土坑1基、ピット2基を検出した。遺物は基本層、遺構堆積土からロクロ土師器、須恵器が出土している。

第1号溝跡 SD1

調査区中央部で検出した東西方向の溝跡である。SK1土坑と重複し、これよりも古い。検出長は約3.40mで、規模は上端幅約3.50mである。下端幅、深さ、断面形は部分的な調査であることから不明であるが、上部の壁は比較的緩やかに傾斜する。堆積土は4層に細別され、炭化物や円礫を含むにぶい黄褐色や暗褐色などの粘土である。

遺物は、堆積土上層から須恵器甕1点が出土している。体部の小破片で、全体の器形を把握することはできない。

第1号土坑 SK1

調査区北部で検出した土坑である。SD1溝跡と重複し、これよりも新しい。平面形は不整形円形を呈する。規模は東西約1.05m、南北約1.00mで、深さ0.40mほどである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は2層に細別され、円礫を含む暗褐色の粘土質シルト、黒褐色の粘土である。遺物は、須恵器甕1点が出土している。体部の小破片で、全体の器形を把握することはできない。

ピット1

調査区北部で検出した柱穴である。他の遺構との重複はない。平面形は円形を呈し、径は0.35mである。湧水のため、底面は確認できなかったが、深さ0.25m以上である。掘方埋土は基本層Ⅱ層起源の黄褐色細砂を小ブロック状に含む暗褐色の粘土質シルトである。柱痕跡は径0.15mほどの円形を呈する。堆積土はややしまりのない黒褐色の粘土である。遺物は出土していない。

(5) 遺構外出土遺物

基本層Ⅰ層からロクロ土師器甕の破片2点が出土している。

(6) まとめ

今回の調査では、Ⅱ層上面およびⅢ層上面で溝跡1条、土坑1基、柱穴1基を検出した。SD1溝跡は、上端幅約3.50mである。これより新しい遺構には、SK1土坑がある。いずれも、性格をと時期を判断することはできなかった。今回の調査地点は、城館跡の中央部に位置する主郭部とみられる区画の北側に隣接している。SD1溝跡は、その規模から、富沢館跡に関連する遺構の可能性もある。

土層注記

SD1

層位	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘土	炭化物をごく少量、礫を少量含む。
2	2.5Y4/3	オリーブ褐色	粘土	小礫をごく少量含む。
3	2.5Y4/2	暗灰黄色	粘土	小礫をごく少量含む。
4	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	粘土	礫と砂をやや多く含む。

SK1

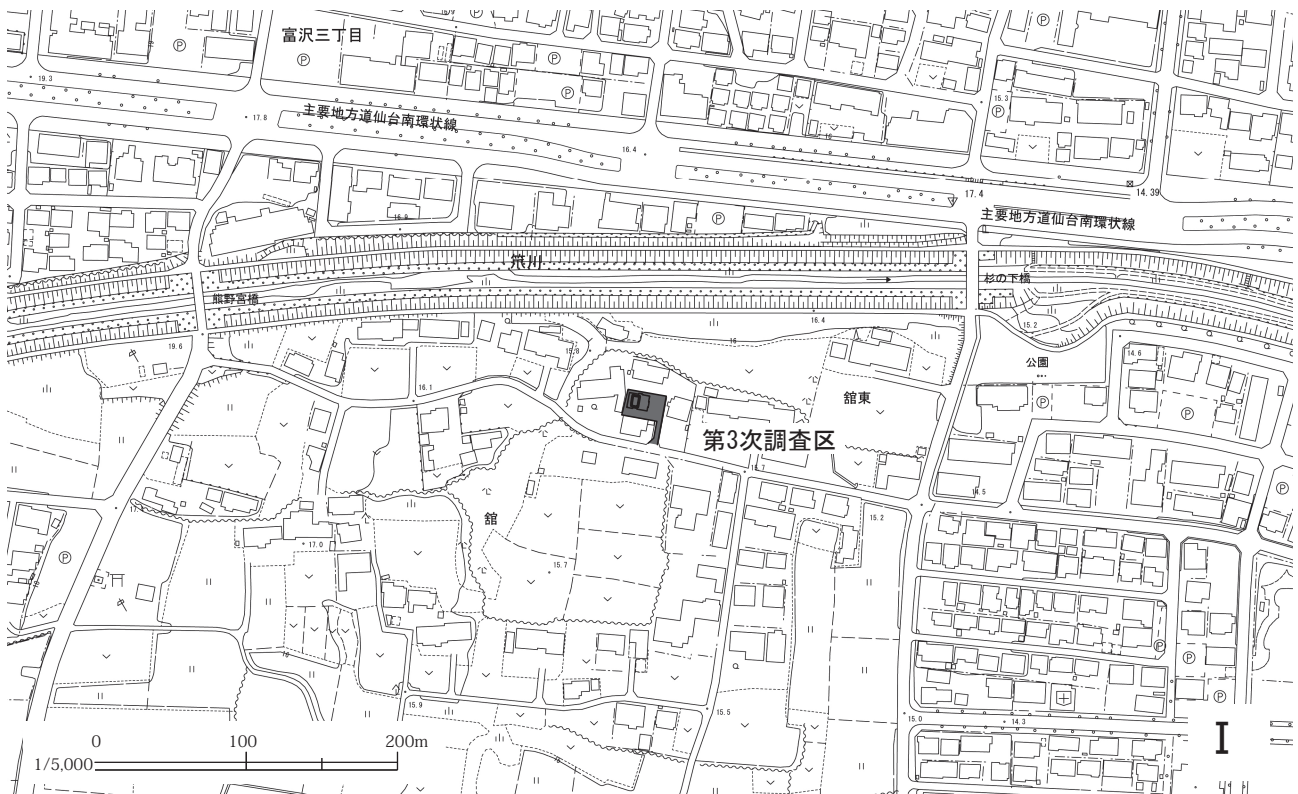
層位	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR3/3	暗褐色	粘土質シルト	礫をごく少量含む。
2	10YR3/2	黒褐色	粘土	礫を少量含む。

P1

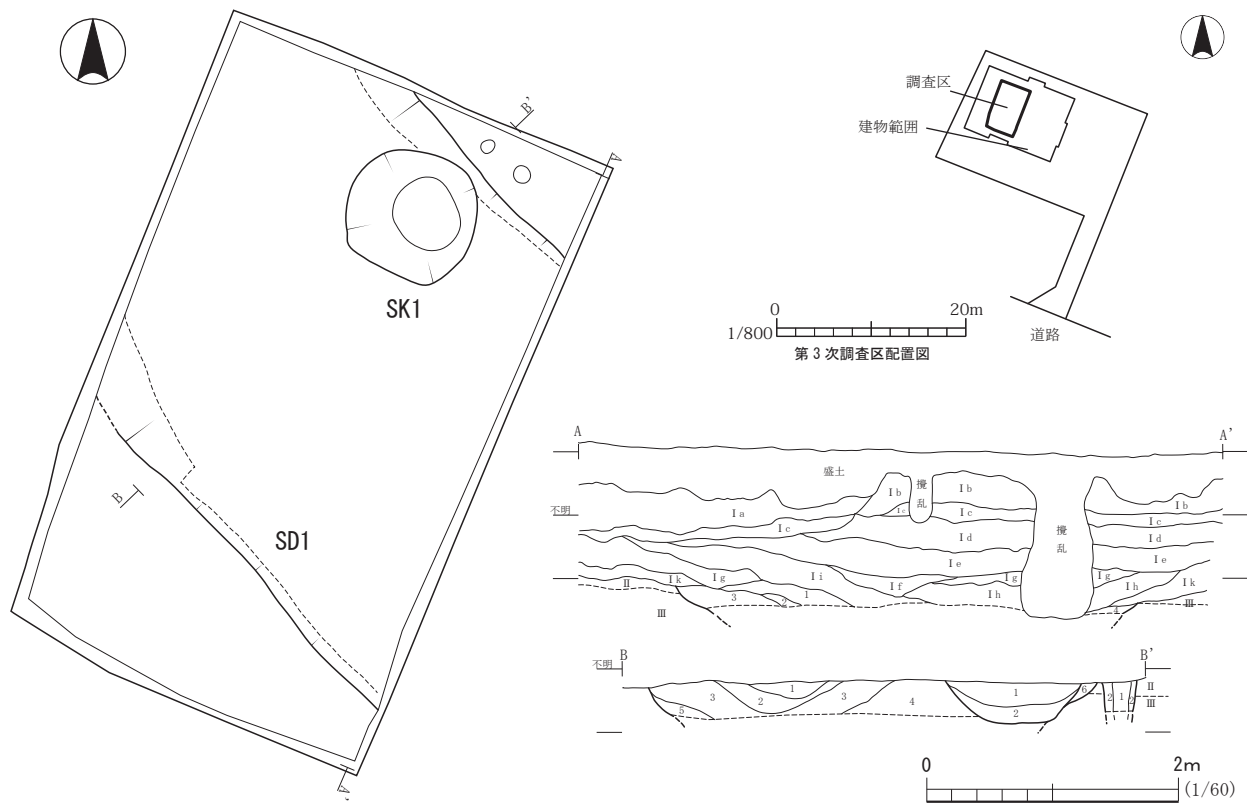
層位	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR3/2	黒褐色	粘土	柱痕跡。にぶい黄褐色(10YR5/4)細砂を粒状にごく少量含む。
2	10YR3/3	暗褐色	粘土質シルト	掘方埋土。にぶい黄褐色(10YR5/4)細砂をブロック状に含む。

P2

層位	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR3/3	暗褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色(10YR5/4)細砂をブロック状に含む。



第IV-3図 富沢館跡第3次調査位置図



第IV-4図 富沢館跡第3次調査



1. 調査区遺構確認状況（南から）



2. 調査区遺構確認状況（南西から）



3. SK1土坑（東から）



4. 調査区東壁断面（北西から）

写真図版IV-1

第3節 郡山遺跡

1 遺跡の概要

郡山遺跡は、宮城県仙台市太白区郡山二丁目から六丁目にかけて所在する。JR仙台駅の南東約4.4kmに位置し、郡山低地とよばれる広瀬川と名取川の合流点付近の川間にある沖積平野の自然堤防上に立地する。遺跡の範囲は、東西約0.8km、南北約0.9kmで、標高は8～12mほどである。その一部は、平成18年に「仙台平野郡山官衙遺跡群 郡山遺跡 郡山廃寺跡」として国史跡に指定されている。

郡山遺跡は、縄文時代から中世にかけての複合遺跡で、その主体は飛鳥時代から奈良時代初期の官衙、寺院である。これまで、確認調査をはじめ、区画整理事業、宅地造成、個人住宅建設などに伴い、断続的に発掘調査が行われ、資料の蓄積が進んでいる。

弥生時代の遺構や遺物は、遺跡の南部に分布している。遺構には、中期中頃以前の水田跡がある。遺物には、前期から後期の弥生土器のほか、剥片石器、石包丁、石鏃などの石器がある。しかし、遺跡内や周辺での居住域の確認には至っていない。

官衙には2時期の変遷があり、Ⅰ期官衙とⅡ期官衙に大別される。Ⅰ期官衙は、東西約0.6km、南北約0.4kmの範囲にわたり、7世紀中頃から後葉に機能した考えられている。Ⅱ期官衙は、一辺四町四方（約428m）のほぼ正方形を呈し、造営の基準方向を真北としている。7世紀末から8世紀初頭にかけて多賀城が創建される前までの陸奥国府と考えられている。郡山廃寺はⅡ期官衙の付属寺院である。

また、官衙の周辺には、関連するとみられる遺跡が分布している。西側に隣接する長町南遺跡と西台畑遺跡では、官衙と同時期の居住域が調査され、500軒を超える竪穴住居跡が検出されている。また、遺跡の南西約1.5kmには、Ⅱ期官衙と方向が類似し、同時期の官衙遺跡と考えられている大野田官衙遺跡があり、関連が窺われる。

2 第224次調査

(1) 調査要項

遺跡名: 郡山遺跡 (宮城県遺跡登録番号01003) 調査地点: 仙台市太白区郡山3丁目51-33
調査期間: 平成24年6月27日 調査対象面積: 48.8㎡ 調査面積: 6.3㎡ 調査原因: 個人専用住宅建築工事
調査員: 調査調整係 小泉博明 整備活用係 石山智之

(2) 調査地点と調査経過

対象地は、郡山遺跡の北部に位置する。確認調査は平成24年6月27日に行った。建築範囲内に東西2.10m、南北3.00mの調査区を設定し、重機を用いて盛土を掘削した。盛土厚が1.40mにおよぶことが確認されたことから、安全面を考慮し、盛土下の基本層Ⅰ層の除去と基本層Ⅱ層の検出は一部に留めた。遺構検出は基本層Ⅱ層上面で行ったが、遺構の検出には至らなかった。同日中に調査区の埋め戻しを行い、今回の調査を終了した。

(3) 基本層序

基本層は、2層を確認した。Ⅰ層は基本層Ⅱ層を斑状に含む暗オリーブ褐色のシルトで、宅地化以前の畑地耕作土である。Ⅱ層は均質なぶい黄褐色の砂質シルトで、今回の調査における遺構検出面である。層上面には漸移的な変化が認められる。なお、今回の調査地点では、層厚約1.40mの宅地化に伴う盛土がある。

層位	マンセル	土色	土質	備考
Ⅰ	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	シルト	黄褐色(2.5Y5/3)砂質シルトを斑状に含み、炭化物をごく少量含む。
Ⅱ	2.5Y5/3	黄褐色	砂質シルト	比較的均質。

(4) 検出遺構と出土遺物

遺構は検出されなかった。

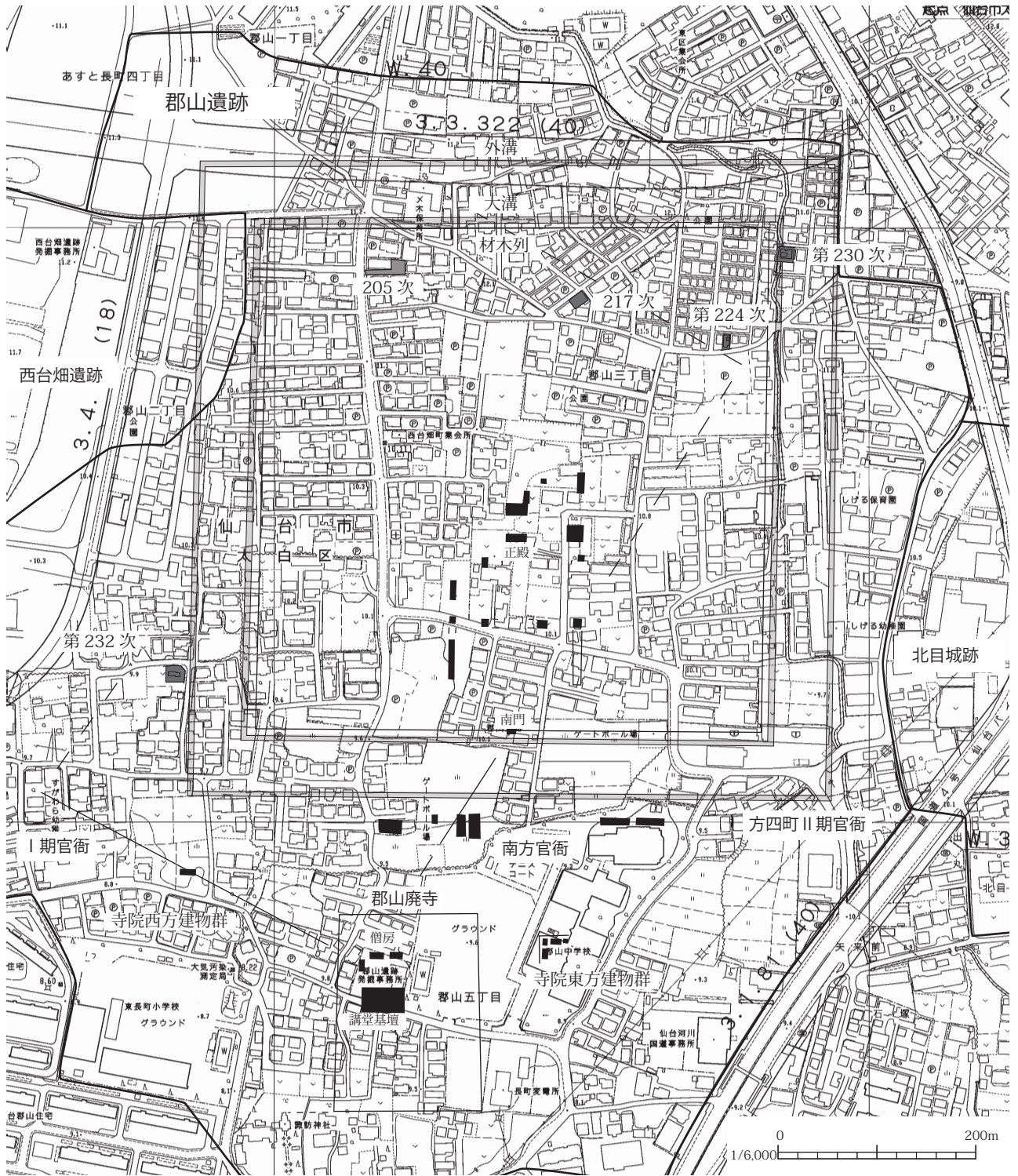
(5) 遺構外出土遺物

基本層Ⅰ層から、土師器甕が1点出土している。体部の破片資料で、長胴形を呈するものとみられる。外面調整は縦方向のハケメである。全体の器形を把握することはできず、時期は不明である。

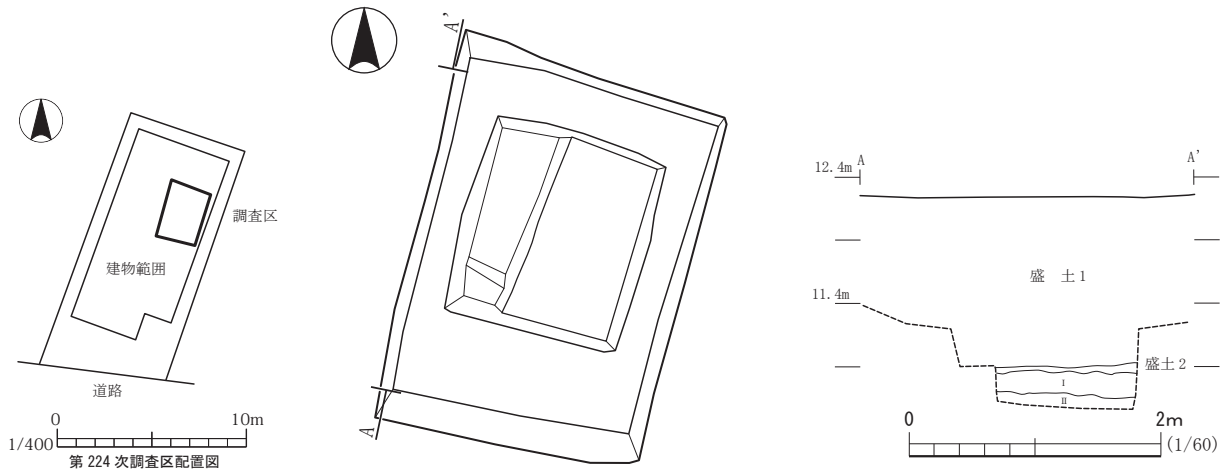
(6) まとめ

今回の調査では、遺構は検出されなかった。状況から、既に削平を受けている可能性が高いと判断される。近接す

る 第114次、第175次、第214次調査でも同様であり、周辺でかつて広範囲にわたって行われたレンガ生産のための土取りの影響と推定される。



第IV-5図 郡山遺跡と調査位置図



第IV-6図 郡山遺跡第224次調査



1. 調査区全景（南から）



2. 調査区西壁断面（東から）

写真図版IV-2

3 第230次調査

(1) 調査要項

遺跡名: 郡山遺跡 (宮城県遺跡登録番号01003) 調査地点: 仙台市太白区八本松2丁目38-15
 調査期間: 平成24年9月6日～10日 調査対象面積: 59.5㎡ 調査面積: 14.5㎡
 調査原因: 個人専用住宅建築工事 担当職員: 主査 平間亮輔 文化財教諭 橋本勇人

(2) 調査地点と調査経過

対象地は、郡山遺跡の北東部に位置し、郡山遺跡Ⅱ期官衙の外郭大溝が通過すると想定された地点である。確認調査は平成24年9月6日～10日に実施した。住宅建築範囲内に、東西4.0m、南北3.0mの調査区を設定し、重機により盛土及び基本層Ⅰ層を除去した。遺構確認作業は基本層Ⅱ層上面で実施した。調査区東部にはレンガを廃棄するための大規模な攪乱坑があり遺構面が広く破壊されていたが、調査区西部で南北方向の溝跡を1条確認した。これを受けて、記録保存を目的とした本発掘調査へ移行した。9月10日に調査区の埋め戻しを行い、調査を終了した。

(3) 基本層序

基本層は2層を確認した。Ⅰ層は黄灰色の粘土で、調査区全面に分布する。層厚約0.20mで、耕作土と推定される。Ⅱ層はにぶい黄褐色の粘土で、層厚0.80m以上である。上面でSD1溝跡を確認している。郡山遺跡ではこの層の上面で遺構を確認している場合が多い。なお、今回の調査地点では、宅地化に伴う約0.70～0.80mの盛土がある。

層位	マンセル	土色	土質	備考
I	2.5Y4/1	黄灰色	粘土	マンガンを粒状に少量含む。耕作土の可能性ある。
II	10YR5/3	にぶい黄褐色	粘土	マンガンを粒状に少量、酸化鉄を斑紋状に少量含む。

(4) 発見遺構と出土遺物

遺構面はII層上面である。溝跡1条検出した。出土遺物には、陶器がある。

第1号溝跡 SD1

調査区西部に位置する南北方向の溝跡である。基本層II層上面で確認した。検出長は約2.4mで、さらに調査区外南北へ延びる。部分的な検出であることから、規模は不明であるが、上端幅1.5m以上で、深さ0.8m以上である。堆積土は3層に細別される。上層の1～2層は暗灰黄色や黄褐色の粘土である。下層の3層は灰色やオリーブ黒色の粘土と細砂の互層で、小枝や木片などを含み、水成堆積の様相を呈している。

遺物は3層から陶器が1点出土している。陶器は大堀相馬碗で、時期は18世紀代である。

(5) 遺構外出土遺物

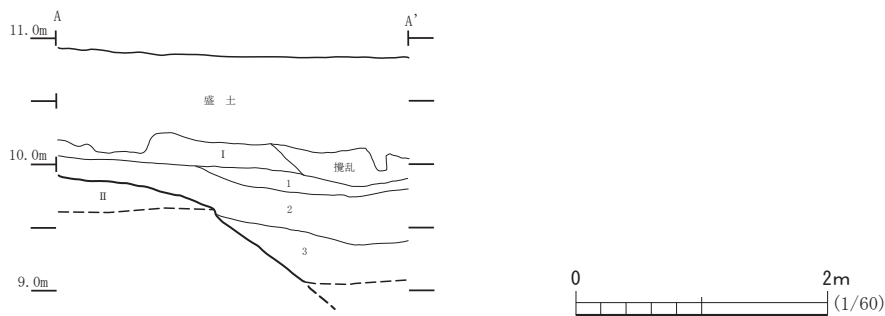
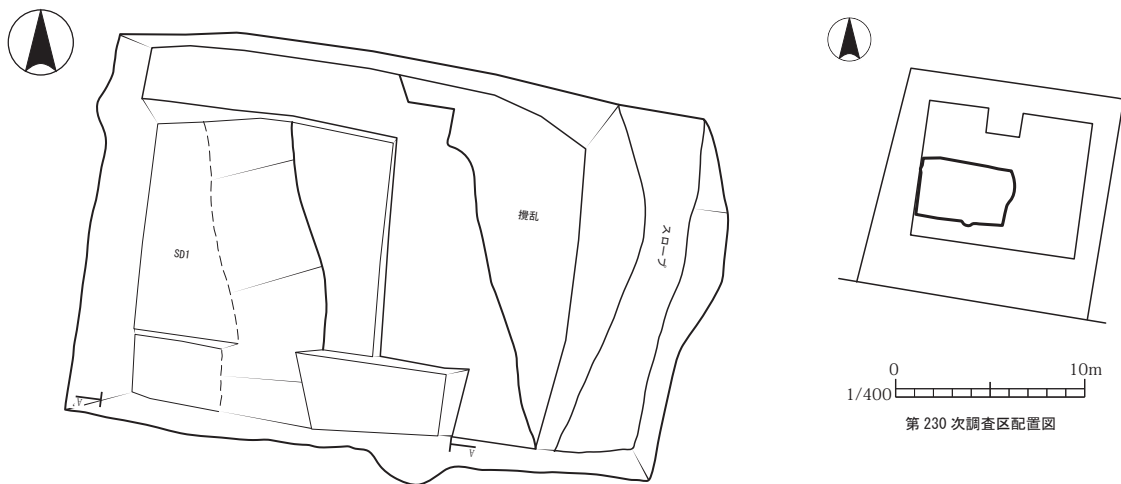
遺物は出土していない。

(6) まとめ

当調査区は、郡山遺跡II期官衙の外郭大溝が通過すると想定された地点である。今回確認されたSD1溝跡は、位置関係からは外郭大溝に相当するが、堆積土下層が水成堆積層であることと、この層から出土した陶器は大堀相馬碗であり、その年代は18世紀代である。このことから、SD1溝跡は近世以降に属すると考えられ、郡山官衙に関わる遺構ではないと判断される。当該宅地のすぐ西側には通称「郡山堀」と呼ばれる水路が流れていることから、この水路の旧流路である可能性がある。

SD1

層位	マンセル	土色	土質	備考
1	2.5Y4/2	暗灰黄色	粘土	マンガンを粒状に微量、酸化鉄を斑紋状に少量含む。
2	2.5YR5/3	黄褐色	粘土	マンガンを粒状に少量、酸化鉄を斑紋状に少量含む。
3	5Y4/1	灰色	細砂	オリーブ黒色(5Y3/2)の粘土との互層、木炭を粒状に少量、木片(小枝など)を少量含む。



第IV-7図 郡山遺跡第230次調査



1. 調査区全景（北から）



2. SD1溝跡断面（北から）

写真図版IV-3

4 第232次調査

(1) 調査要項

遺跡名: 郡山遺跡（宮城県遺跡登録番号01003） 調査地点: 仙台市太白区郡山二丁目8-10
 調査期間: 平成24年9月20日～10月 調査対象面積: 89.3㎡
 調査面積: 32.3㎡（本調査区21.8㎡, 拡張区10.5㎡） 調査原因: 個人専用住宅建築工事
 担当職員: 調査調整係 主事 小泉博明 文化財教諭 伊藤翔太 佐藤高陽
 整備活用係 文化財教諭 石山智之

(2) 調査地点と調査経過

第232次調査は、郡山官衙遺跡の西部にあたり、隣接する第206次調査などでは、郡山官衙遺跡に関連するとみられる遺構が検出されていることから、今回の調査でも該期の遺構が検出されることが予想された。確認調査は平成24年9月20日に着手した。重機を用いて、盛土および基本層Ⅰ～Ⅱ層を除去し、基本層Ⅲ層上面で遺構検出作業を行った。その結果、材木堀跡1条、溝跡5条、土坑2基、柱穴3基を検出した。このうち、SA1材木柱列は、位置や方向、遺構の正確などから郡山Ⅰ期官衙に関連する遺構の可能性が考えられた。このことから、9月27日にSA1材木柱列を対象とした保存等の協議を実施したが、住宅の構造上の都合により、設計変更等が困難であることが判明した。これを受けて、文化財課調査調整係と整備活用係で検討した結果、調査区の拡張を行い、住宅建築により遺構が影響を受ける範囲については、記録保存を目的とした調査を実施し、影響を受けない範囲については、平面精査に留めて、保存を図ることとなり、合意を得た。調査区の拡張は10月1日から行い、SA1材木列の他、溝跡1条、土坑1基、柱穴4基、ピット4基を検出した。10月5日に、調査区を埋め戻して、すべての調査を終了した。

(3) 基本層序

基本層は、大別8層、細別11層を確認した。Ⅰ層は宅地化以前の畑地耕作土である。層厚約0.40～0.60mで、4層に細別される。Ⅱ層はにぶい黄褐色の粘土を含む黄灰色の粘土である。遺構は、すべてⅡ層上面で検出された。Ⅲ層は均質な黄褐色の粘土である。Ⅳ層は褐灰色の粘土と黄褐色のシルトの互層である。層厚は0.20m前後である。Ⅴ層は灰黄褐色の粘土である。層厚は数cmである。Ⅵ層は黄灰色の粘土である。層厚は数cmである。Ⅶ層は黒味の強い黒褐色の粘土で、にぶい黄褐色の粘土を斑状に含む。層厚は数cmである。Ⅷ層は比較的均質なにぶい黄褐色の粘土である。対象地の宅地化に伴う盛土の層厚は、約0.30～0.50mである。なお今回の調査では、遺構の調査を基本層Ⅲ層上面で行っている。また、宅地化に伴う層厚約0.30～0.50mの盛土がある。

層位	マンセル	土色	土質	備考
I	5Y3/2	オリーブ黒色	シルト	均質。層下面に酸化鉄沈着。
I b	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	シルト	炭化物と焼土をごく少量含む。
I c	2.5Y4/3	オリーブ褐色	シルト	褐灰色(10YR4/1)粘土をブロック状に多く含む。
I d	10YR3/4	暗褐色	粘土質シルト	焼土、炭化物を粒状に若干含む。
II	2.5Y4/1	黄灰色	粘土	にぶい黄褐色(10YR5/3)粘土を斑状に含む。
III	2.5Y5/3	黄褐色	粘土	均質。層下面に酸化鉄沈着。
IV	10YR4/1	褐灰色	粘土	黄褐色(2.5Y5/3)粘土を互層状に含む。
V	10YR4/2	灰黄褐色	粘土	
VI	10YR5/3	にぶい黄褐色	粘土	均質。層下面に酸化鉄沈着。
VII	10YR2/2	黒褐色	粘土	にぶい黄褐色(10YR5/3)粘土を斑状に含む。
VIII	10YR5/3	にぶい黄褐色	粘土	均質。

(4) 発見遺構と出土遺物

遺構面は、II層上面である。材木堀跡1条、溝跡6条、土坑3基、柱穴7基、ピット4基を検出した。遺物は基本層I層、遺構堆積土から土師器、須恵器が出土している。

第1号材木列跡 SA1

調査区中央部～東部で検出した北西～南東方向の材木列跡である。方向は東から36°南に偏している。SD2溝跡、SD5溝跡と重複し、SD2よりも古く、SD5よりも新しい。検出長は約6.30mで、さらに調査区外へ延びる。掘方の規模は上端幅約0.30～0.40m、下端幅約0.20～0.25mである。深さ約0.05～0.50mである。断面形は箱状を呈し、壁は底面から急に立ち上がる。掘方埋土は黒褐色の粘土質シルトで、黄褐色の粘土質をブロック状に多く含む。柱痕跡は15箇所を検出した。径0.10～0.20mの円形もしくは楕円形を呈し、堆積土はしまりのない黒褐色の粘土である。柱材は0.2～0.6mほどの間隔をもって配置されている。遺物は、掘方埋土から土師器甕1点が出土している。体部の小破片で、図示することはできない。遺構の時期は、出土遺物から判断することはできない。

第1号溝跡 SD1

調査区西部で検出した東西方向の溝跡である。SD2、SD4溝跡、SK3土坑、SK4柱穴と重複し、SD4より古く、SD2、SK3、SK4よりも新しい。検出長は約3.65mで、さらに調査区外西へ延びる。規模は上端幅約0.40m、下端幅約0.25mほどで、深さ0.20cmほどである。断面形は逆台形を呈し、壁は底面からやや急に立ち上がる。堆積土は2層に細別され、比較的均質な黒褐色の粘土質シルトおよびにぶい黄褐色の粘土を含む暗オリーブ褐色の粘土質シルトである。遺物は土師器杯2点・甕8点、須恵器甕1点が出土している。このうち、土師器杯(第IV-10図1)を図示した。外面に段や稜はなく、体部は内弯気味に立ち上がる。内外面ともに調整はヘラミガキで、黒色処理が施される。

第2号溝跡 SD2

調査区西部で検出した南北方向の溝跡である。SD1溝跡、SD3溝跡、SK1土坑、SK3・SK4柱穴と重複し、SD1、SK1よりも古く、SD3、SK4よりも新しい。検出長は約2.90mで、さらに調査区外南北へ延びる。規模は上端幅約0.80m、下端幅約0.40～0.50mで、深さ0.30cmほどである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は単層で、にぶい黄褐色の粘土を含む暗オリーブ褐色の粘土質シルトである。遺物は土師器杯1点・甕21点が出土している。甕には頸部に段がつくものがある。いずれも小破片であり、全体の器形を把握できるものはない。

第3号溝跡 SD3

調査区西部で検出した東西方向の溝跡である。SD2溝跡、SK2柱穴と重複し、いずれよりも古い。検出長は約2.00mである。規模は上端幅約0.40～0.90m、下端幅約0.20～0.75mで、深さ数cmである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は単層で、にぶい黄褐色の粘土を含む暗褐色のシルトである。遺物は出土していない。

第4号溝跡 SD4

調査区西部で検出した東西方向の溝跡である。SD4・SD6溝跡と重複し、いずれよりも新しい。検出長は約2.15mである。規模は上端幅1.00m以上、下端幅は不明である。深さ0.50m以上である。断面形は不明であるが、溝跡南壁は比較的緩やかに立ち上がる。堆積土は4層を確認した。上層は炭化物を含む黒褐色などのシルトである。3層はしまりのない焼土主体層である。4層は黄灰色の砂質シルトを互層状に含み、水成堆積の様相を示す。遺物は土師器杯1点・甕10点、須恵器蓋1点が出土している。このうち、須恵器蓋(第IV-10図6)を図示した。端部は短く下方に折れ、内面にやや外側に反るカエリがある。外面調整は回転ヘラケズリである。

第5号溝跡 SD5

調査区東部で検出した南北方向の溝跡である。SA1材木列跡と重複し、これよりも古い。検出長は約0.90mで、さらに調査区外南へ延びる。規模は上端幅約0.35m、下端幅約0.25mで、深さ0.20cmほどである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は単層で、にぶい黄褐色の粘土を含む暗褐色の粘土質シルトである。遺物は出土していない。

第6号溝跡 SD6

調査区西部で検出した東西方向の溝跡である。SD2・SD4溝跡と重複し、SD4より古くSD2より新しい。検出長は約2.15mである。規模は上端幅0.40m以上、下端幅は不明である。深さ0.30m以上である。断面形は不明であるが、溝跡南壁は比較的急に立ち上がる。堆積土は1層を確認した。黄灰色の砂質シルトを斑状に含む黒褐色の粘土質シルトで、水成堆積の様相を示す。遺物は出土していない。

第1号土坑 SK1

調査区西部で検出した土坑である。SD2溝跡と重複し、これよりも新しい。一部の検出であることから、全体を把握できないが、平面形は楕円形を基調としたものとみられる。規模は長軸0.50m以上、南北0.80m以上、深さ0.30mほどである。断面形はU字状を呈する。堆積土は3層に細別され、炭化物やにぶい黄褐色の粘土を含む黒褐色および暗褐色の粘土質シルト、粘土である。遺物は出土していない。

第3号土坑 SK3

調査区西部で検出した土坑である。SD1溝跡、SD2溝跡、SK4柱穴と重複し、SD1溝跡、SD2溝跡よりも古く、SK4柱穴よりも新しい。一部をSD1溝跡に壊されていることから、全体を把握できないが、平面形は円形を基調としたものとみられる。規模は径0.70mほどとみられ、深さ0.50mほどである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は2層に細別され、焼土やにぶい黄褐色の粘土を含む黒褐色の粘土質シルトである。遺物は土師器甕5点が出土している。いずれも体部の小破片で、全体の器形を把握できるものはない。

第2号土坑（柱穴） SK2

調査区西部で検出した柱穴である。SD3溝跡と重複し、これよりも新しい。一部の検出であるが、掘方の平面形は円形を基調としたものとみられ、規模は東西約0.50m、南北0.40m以上である。深さ約0.50mである。調査区南壁面の観察から、柱材は抜き取られたものとみられる。掘方埋土はにぶい黄褐色の粘土をブロック状に含む暗褐色の粘土質シルトである。抜き取り穴の堆積土は焼土、炭化物をブロック状に含む黒褐色および暗褐色のシルト、粘土質シルトである。遺物は出土していない。

第4号土坑（柱穴） SK4

調査区西部で検出した柱穴である。SD1溝跡、SD2溝跡、SK3土坑と重複し、いずれよりも古い。他の遺構との重複で壊されているが、掘方の平面形は円形を基調としたものとみられ、径0.60mほどとみられる。深さ約0.45mである。掘方埋土はにぶい黄褐色の粘土をブロック状に含む黒褐色および暗オリーブ褐色の粘土質シルトである。柱痕跡は径0.20mほどの円形を呈するものとみられ、堆積土は焼土、炭化物を含む黒褐色の粘土である。

遺物は掘方埋土から土師器甕4点、須恵器甕1点が出土している。いずれも体部の小破片で、全体の器形を把握できるものはない。

第5号土坑（柱穴） SK5

拡張区東部で検出した柱穴である。SK6土坑、SK10柱穴と重複し、いずれよりも新しい。掘方の平面形は隅丸方形を呈する。規模は東西約0.45m、南北約0.40mで、深さ約0.35mである。掘方埋土はにぶい黄褐色の粘土を含む黒褐色および暗褐色の粘土質シルトである。柱材は抜き取られたものとみられる。抜き取り穴は径0.25mほどの円形を呈し、堆積土は炭化物を含む黒褐色および暗褐色の粘土質シルトである。遺物は掘方埋土から土師器甕2点が出土している。いずれも体部の小破片で、全体の器形を把握できるものはない。

第6号土坑 SK6

調査区東部で検出した土坑である。SK5柱穴、SK10柱穴、P4と重複し、いずれよりも古い。一部の検出であることから、全体を把握できないが、平面形は長方形もしくは楕円形を基調としたものとみられる。規模は長軸1.30m以上、南北0.80m、深さ0.40mほどである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は9層に細別され、焼土や炭化物、にぶい黄褐色の粘土を含む黒褐色および暗褐色などの粘土質シルト、粘土である。自然堆積土とみられる。遺物は土師器坏6点・甕19点、須恵器蓋1点・壺1点が出土している。このうち、須恵器蓋（第IV-10図7）を図示した。

天井部と口縁部の境に稜がつき、口縁部が外下方に延びる。ツマミの形状は不明である。

第7号土坑（柱穴） SK7

調査区東部で検出した柱穴である。他の遺構との重複はない。掘方の平面形は隅丸方形を呈する。規模は東西約0.45m、南北約0.55mで、深さ約0.50mである。掘方埋土は炭化物とにぶい黄褐色の粘土を含む黒褐色の粘土質シルトである。柱痕跡は径0.20mほどの円形を呈し、堆積土はにぶい黄褐色の粘土を含む黒褐色の粘土である。遺物は掘方埋土から土師器が出土している。

第8号土坑（柱穴） SK8

調査区東部で検出した柱穴である。他の遺構との重複はない。掘方の平面形は隅丸方形を呈する。規模は東西約0.50m、南北約0.50mで、深さ約0.55mである。掘方埋土は炭化物とにぶい黄褐色の粘土を含む黒褐色および暗褐色の粘土質シルトである。柱痕跡は径0.20mほどの円形を呈し、堆積土はにぶい黄褐色の粘土を含む黒褐色の粘土である。遺物は掘方埋土から土師器甕1点が出土している。破片資料であるが、口頸部に軽い段が認められる。

第9号土坑（柱穴） SK9

調査区中央部で検出した柱穴である。他の遺構との重複はない。一部の検出であるが、掘方の平面形は方形を基調としたものとみられ、規模は東西約0.40m以上、南北0.55m以上である。深さ約0.50mである。掘方埋土はにぶい黄褐色の粘土を粒状に含む黒褐色の粘土質シルトである。柱痕跡は径0.20mほどの円形を呈し、堆積土は炭化物を含む黒褐色の粘土である。

遺物は掘方埋土から土師器甕1点、礫石器1点が出土している。土師器甕は、体部の小破片で、全体の器形を捉えることはできない。礫石器は敲き石（第37図8）である。安山岩製で、一方の端部に敲打痕が認められる。

第10号土坑（柱穴） SK10

調査区東部で検出した柱穴である。SK6土坑、SK5柱穴と重複し、SK5柱穴よりも古く、SK6土坑よりも新しい。掘方の平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長軸0.55m以上、短軸約0.55mで、深さ約0.45mである。掘方埋土はにぶい黄褐色の粘土を含む黒褐色およびオリブ褐色の粘土質シルトである。柱痕跡は径0.15mほどの円形を呈し、堆積土はにぶい黄褐色の粘土を含む黒褐色の粘土である。遺物は出土していない。

ピット

調査区東部で4基を検出した。P4はSK6土坑と重複し、これよりも新しい。平面形は円形もしくは楕円形を呈する。柱痕跡が確認されたものはない。堆積土はいずれも単層で、炭化物やにぶい黄褐色の粘土を含む黒褐色や暗褐色のシルトおよび粘土質シルトである。遺物は出土していない。

(5)遺構外出土遺物

基本層I層から、土師器坏10点・埴1点・高坏2点・甕53点、須恵器蓋2点・甕2点が出土した。このうち、土師器高坏（第IV-10図3）土師器甕（第IV-10図4）、須恵器蓋（第IV-10図5）を図示した。4は底部で、底面には木葉痕が認められる。外面調整はヘラケズリ、内面調整はヘラナデである。3は円筒状を呈している。外面調整はわずかにナデが認められる。内面には、粘土紐を押さえたヘラ状の工具痕が認められる。5は口縁部を欠く。天井部が厚く、外面にはヘラケズリが施される。出土遺物の主体は、体部の小破片が主体を占めるが、土師器坏には、体部外面に段もしくは稜があるものとなないものがある。甕には頸部に軽い段がつくものが含まれる。遺構検出面から、土師器坏2点・甕17点、須恵器長頸瓶1点が出土している。破片資料が主体を占めるが、土師器坏（第IV-10図2）を図示した。体部外面に稜をもつ。外面調整はヨコナデ、ヘラケズリである。内面はヘラミガキの後、黒色処理が施される。

(6)まとめ

調査地点は、郡山遺跡の南西部に位置し、第206次調査区の東側にあたる。今回の調査では、本調査区および拡張区で材木堀跡1条、溝跡6条、土坑3基、柱穴7基、ピット4基を検出した。SA1は位置や遺構の性格などから、郡山官衙遺跡に関わるとみられる遺構である。SA1材木堀跡は、方向は東から36°南に偏している。郡山I期官衙の北辺と平行および西辺に直交する方向となっていることから、郡山I期官衙の区画施設と推定される。

他の遺構の時期は出土遺物が少ないことなどから、明らかにすることはできない。柱穴は、7基を検出した。掘方の規模は比較的大きく、官衙跡に関連する建物跡の可能性もあるが、建物跡は確認されなかった。調査区西部に位置するSD6溝跡は周辺の調査でも検出され、時期は古代以降と考えられている。また、重複関係からSD2・3溝跡、SK3・4土坑などはSA1以後、SD6（SD4）以前である。他に、SA1以前のSD5を確認している。

土層注記

SK 1

層	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR3/4	暗褐色	粘土質シルト	
2	10YR3/3	暗褐色	粘土質シルト	炭化物を粒状に若干含む。
3	10YR2/3	黒褐色	粘土	黄褐色(2.5Y5/3)粘土をブロック状に含む。

SK 2

層	マンセル	土色	土質	備考
1	2.5YR3/2	暗褐色	粘土質シルト	柱抜き取り穴。焼土と炭化物を粒状に若干含む。
2	7.5YR3/2	黒褐色	シルト	柱抜き取り穴。焼土と炭化物をブロック状に含む。
3	10YR3/4	暗褐色	粘土質シルト	黄褐色(2.5Y5/3)粘土をブロック状に多く含む。

SK3

層位	マンセル	土色	土質	備考
1	2.5Y3/2	黒褐色	粘土質シルト	黄褐色(2.5Y5/3)粘土を粒状に少量、焼土を粒状にごく少量含む。
2	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	黄褐色(2.5Y5/3)粘土をブロック状に多く含む。

SK4

層位	マンセル	土色	土質	備考
1	2.5Y3/2	黒褐色	粘土	柱痕跡。焼土と炭化物を粒状に少量含む。
2	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	粘土質シルト	掘方埋土。黄褐色(2.5Y5/3)粘土をブロック状に多く含む、炭化物を粒状にごく少量含む。
3	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	掘方埋土。黄褐色(2.5Y5/3)粘土をブロック状に含む、焼土を粒状にごく少量含む。
4	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	粘土質シルト	掘方埋土。黄褐色(2.5Y5/3)粘土をブロック状にやや多く含む。

SK 5

層位	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR3/3	暗褐色	粘土質シルト	柱痕跡。黄褐色(2.5Y5/3)粘土をブロック状に含む。
2	2.5Y3/2	黒褐色	粘土質シルト	柱痕跡。黄褐色(2.5Y5/3)粘土をブロック状に若干含む。
3	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	掘方埋土。黄褐色(2.5Y5/3)粘土をブロック状に若干含む。
4	2.5Y4/3	オリーブ褐色	粘土質シルト	掘方埋土。黄褐色(2.5Y5/3)粘土をブロック状に若干含む。
5	10YR3/2	黒褐色	粘土	掘方埋土。黄褐色(2.5Y5/3)粘土を粒状に少量含む。

SK6

層位	マンセル	土色	土質	備考
1	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	粘土質シルト	焼土を粒状にごく少量含む。
2	2.5Y4/2	黄灰色	粘土質シルト	黄褐色(2.5Y5/3)粘土を粒状に含む。
3	2.5Y4/1	黄灰色	粘土質シルト	黄褐色(2.5Y5/3)粘土と炭化物を粒状にごく少量含む。
4	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	粘土質シルト	黄褐色(2.5Y5/3)粘土と灰白色火山灰、炭化物を粒状にごく少量含む。
5	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	炭化物を粒状にごく少量含む。
6	2.5Y3/2	黒褐色	粘土質シルト	炭化物を粒状にごく少量含む。
7	10YR3/3	暗褐色	粘土質シルト	黄褐色(2.5Y5/3)粘土をブロック状にごく少量含む。
8	2.5Y3/2	黒褐色	粘土質シルト	焼土と炭化物をごく少量含む。
9	10YR3/2	黒褐色	粘土	黄褐色(2.5Y5/3)粘土をブロック状に含む。

SK7

層位	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR3/2	黒褐色	粘土	柱痕跡。黄褐色(2.5Y5/3)粘土を粒状にごく少量含む。
2	2.5Y3/2	黒褐色	粘土質シルト	掘方埋土。黄褐色(2.5Y5/3)粘土を粒状と小ブロック状に若干、炭化物を粒状にごく少量含む。

SK 8

層位	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR3/2	黒褐色	粘土	柱痕跡。炭化物と黄褐色(2.5Y5/3)粘土を粒状に少量含む。
2	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	粘土質シルト	掘方埋土。炭化物と黄褐色(2.5Y5/3)粘土を小ブロック状に少量含む。
3	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	掘方埋土。黄褐色(2.5Y5/3)粘土をブロック状に多く含む。

SK9

層	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR3/2	黒褐色	粘土	柱痕跡。炭化物を粒状にごく少量含む。
2	2.5Y3/2	黒褐色	粘土質シルト	掘方埋土。炭化物を粒状にごく少量含む。

SK10

層位	マンセル	土色	土質	備考
1	2.5Y3/2	黒褐色	粘土質シルト	柱痕跡。黄褐色(2.5Y5/3)粘土をブロック状に若干含む。
2	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	掘方埋土。黄褐色(2.5Y5/3)粘土をブロック状に若干含む。
3	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	掘方埋土。黄褐色(2.5Y5/3)粘土をブロック状に若干含む。

SD1

層	マンセル	土色	土質	備考
1	2.5Y3/2	黒褐色	粘土質シルト	比較的均質。
2	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色(10YR5/3)粘土を粒状にごく少量含む。

SD2

層位	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR3/3	暗褐色	粘土	黄褐色(2.5Y5/3)粘土をブロック状にごく少量含む。
2	10YR3/2	黒褐色	シルト	黄褐色(2.5Y5/3)粘土をブロック状にごく少量含む。

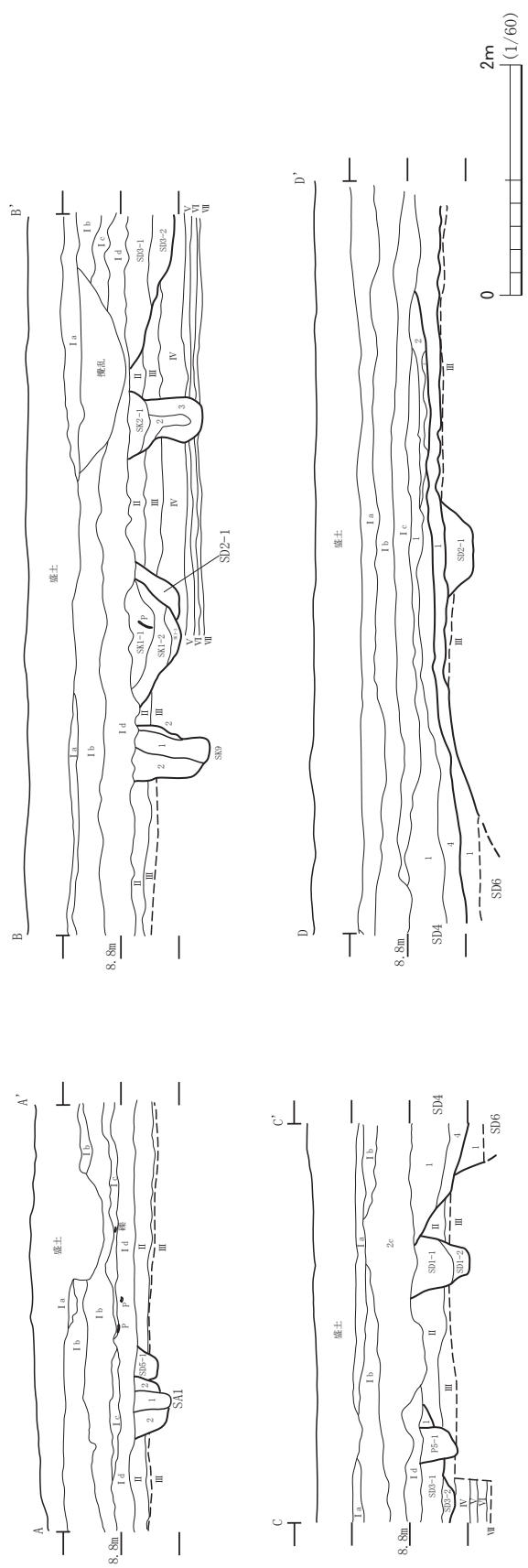
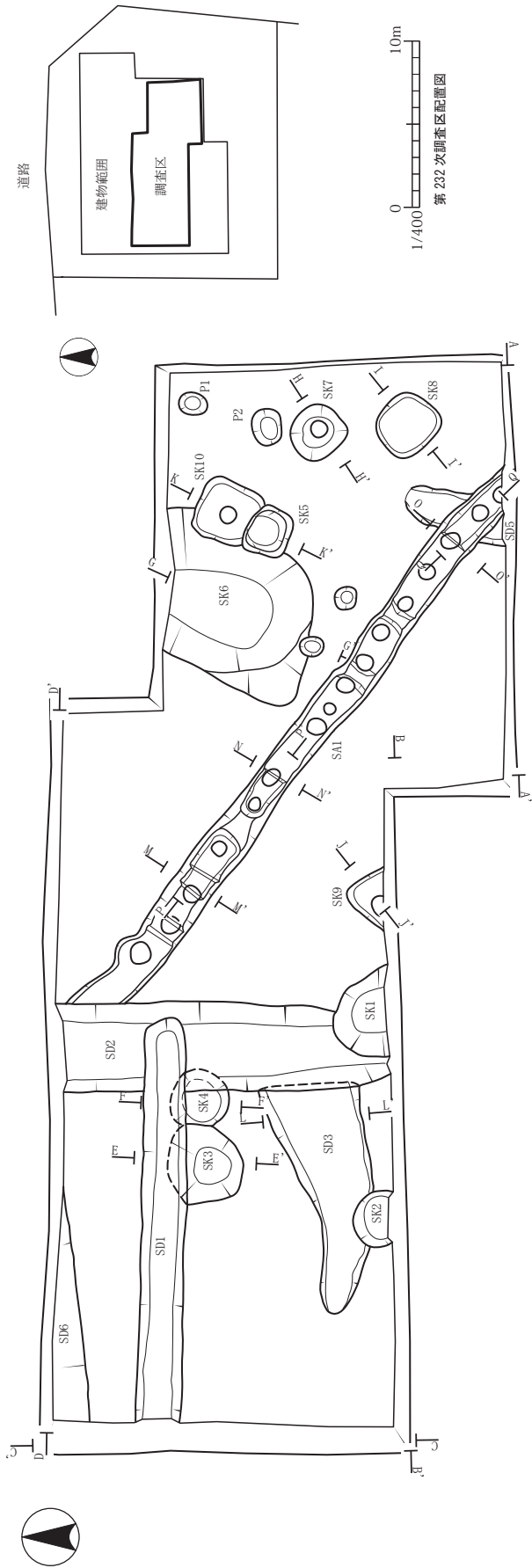
SD 3

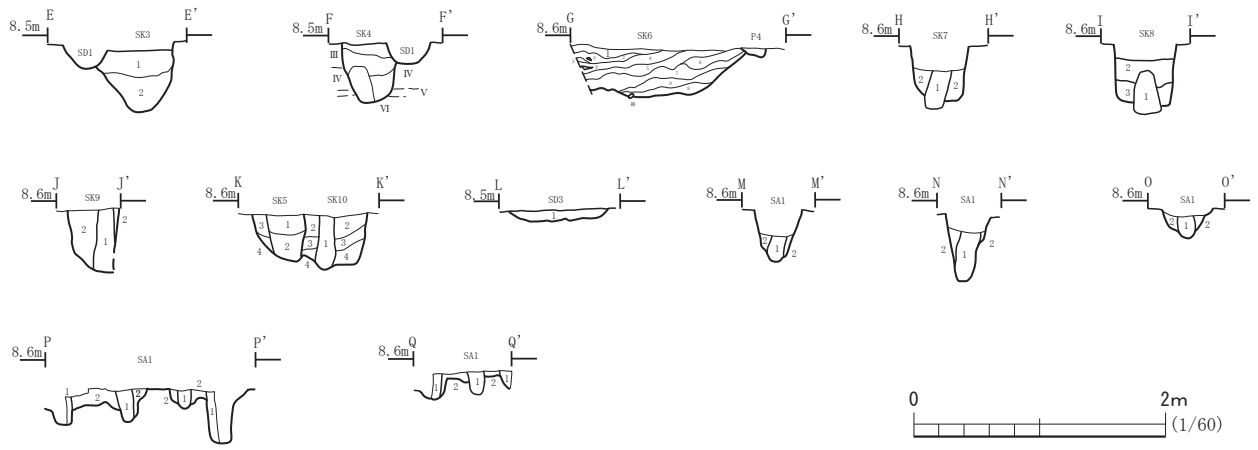
層位	マンセル	土色	土質	備考
1	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	粘土質シルト	黄褐色(2.5Y5/3)粘土を粒状と小ブロックを若干含む、焼土と炭化物を粒状にごく少量含む。

SD4				
層位	マンセル	土色	土質	備考
1	2.5Y3/3	暗褐色	シルト	炭化物を粒状にごく少量含む。
2	10YR3/2	黒褐色	シルト	炭化物を粒状にごく少量含む。
3	7.5Y4/4	褐色	粘土	焼土主体層。
4	2.5Y4/1	黄灰色	粘土	黄灰色 (2.5Y5/1) 砂質シルトとの互層。
SD5				
層	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR3/4	暗褐色	粘土質シルト	黄褐色 (2.5Y5/3) 粘土を粒状に少量含む。
SD6				
層	マンセル	土色	土質	備考
1(5)	2.5Y3/2	黒褐色	粘土	黄灰色 (2.5Y5/1) 砂質シルトを斑状に含む。
SA1				
層	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR3/2	黒褐色	粘土	柱痕跡。黄褐色 (2.5Y5/3) 粘土を粒状に少量含む、炭化物を粒状にごく少量含む。
2	2.5Y3/2	黒褐色	粘土質シルト	掘方埋土。黄褐色 (2.5Y5/3) 粘土をブロック状にやや多く含む。
P1				
層	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR3/3	暗褐色	シルト	黄褐色 (2.5Y5/3) 粘土を小ブロック状に若干含む。
P2				
層	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR3/3	暗褐色	シルト	黄褐色 (2.5Y5/3) 粘土を小ブロック状と炭化物を粒状にごく少量含む。
P3				
層	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR3/4	暗褐色	シルト	炭化物を粒状にごく少量含む。
P4				
層	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	黄褐色 (2.5Y5/3) 粘土をブロック状に若干含む。
P5				
層	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	黄褐色 (2.5Y5/3) 粘土を粒状に少量含む。

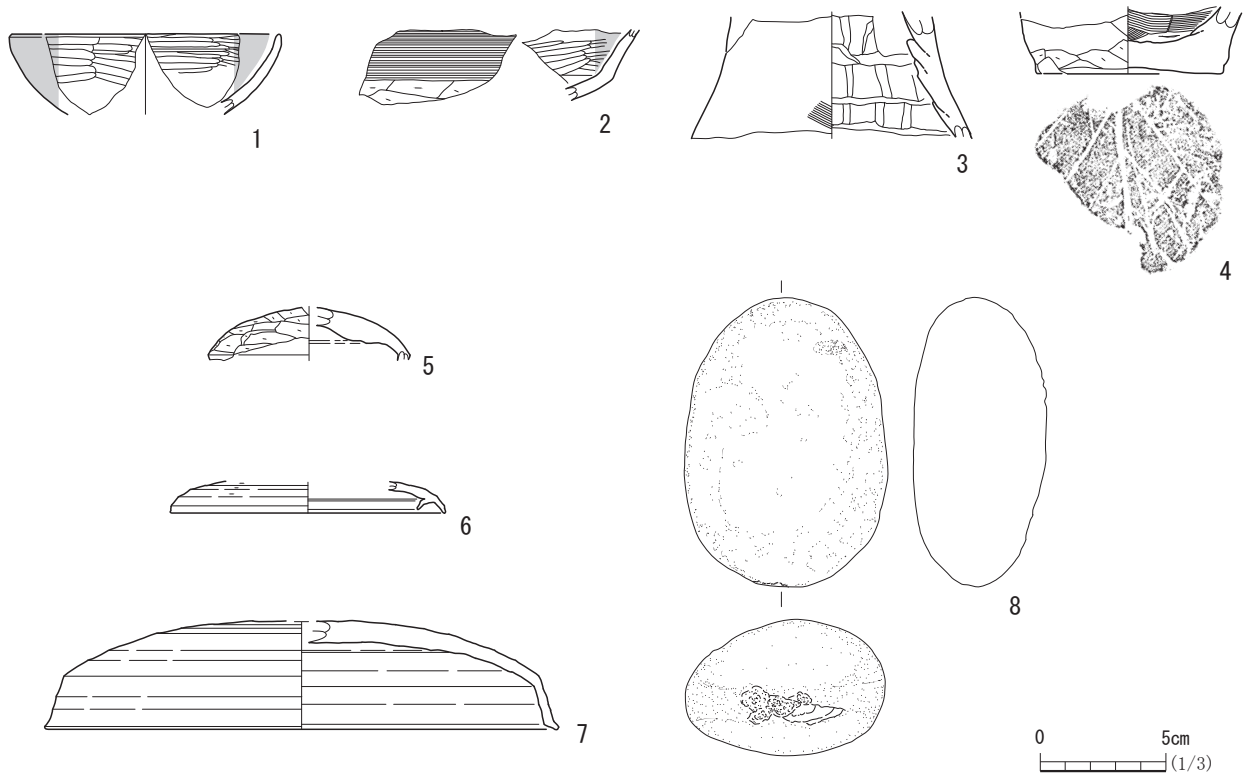
遺物観察表

掲載番号	写真番号	登録番号	出土遺構	出土層位	種別	器種	残存	法量(cm)			調整			特徴・備考
								長	幅	厚	外	内	底	
IV-10-1	IV-4-1	C-4	SD1		土師器	坏	一部	(10.8)	—	(4.2)	ヘラミガキ 黒色処理	ヘラミガキ 黒色処理		
IV-10-2	IV-4-2	C-2		検出面	土師器	坏	一部	—	—	—	ヨコナデ ヘラケズリ	ヘラミガキ 黒色処理		
IV-10-3	IV-4-3	C-3		I層	土師器	高坏	一部	—	—	(5.0)	ナデ	ヘラ状工具痕		
IV-10-4	IV-4-4	C-1		表土	土師器	甕	一部	—	7.7	(2.7)	ヘラケズリ	ヘラナデ	木葉痕	
IV-10-5	IV-4-5	E-1		I層	須恵器	蓋	一部	—	—	(2.2)	ロクロナデ ヘラケズリ	ロクロナデ		
IV-10-6	IV-4-6	E-2	SD4		須恵器	蓋	一部	(10.9)	—	(1.3)	ロクロナデ	ロクロナデ		
IV-10-7	IV-4-7	E-3	SK6		須恵器	蓋	一部	(20.4)	—	(4.3)	ロクロナデ 陶ヘラケズリ	ロクロナデ		
IV-10-8	IV-4-8	K-1	SK9		礫石器	敲石	完形	11.5	8.1	5.3				下面敲打 石材：安山岩

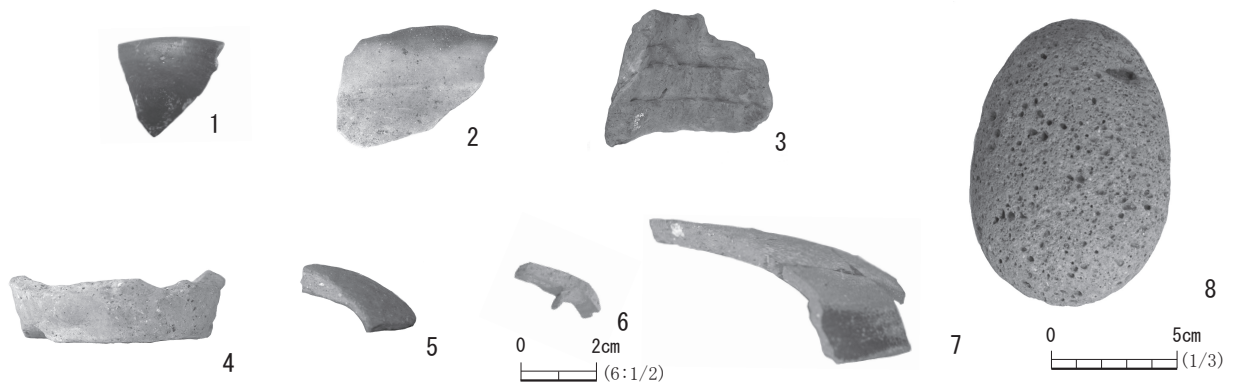




第IV-9图 断面图



第IV-10图 出土遺物



写真図版IV-4



1. 調査区全景（東から）



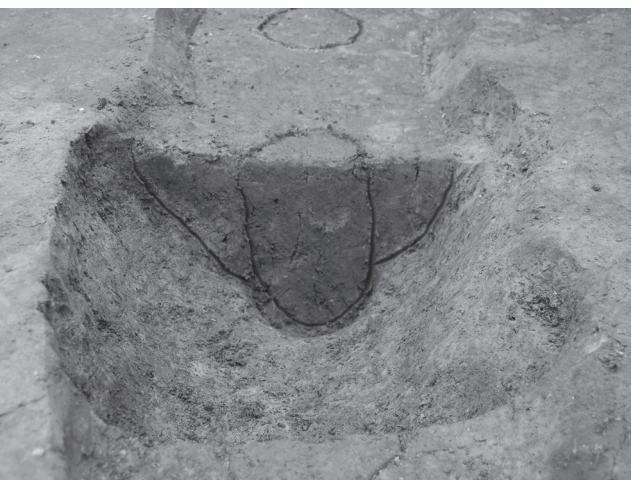
2. 拡張区全景（東から）



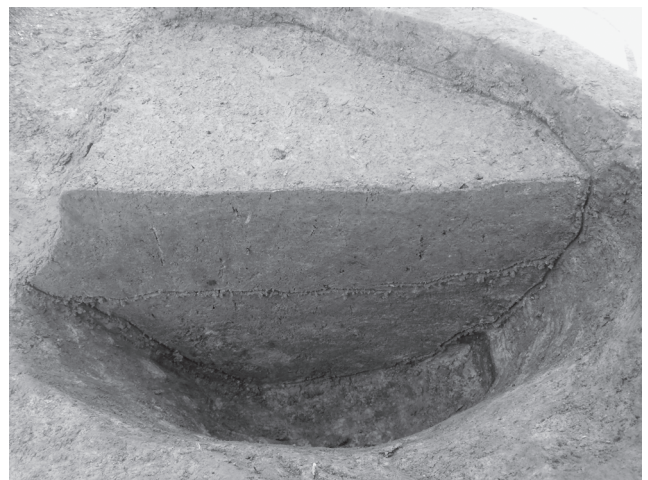
3. SA1材木列跡（南東から）



4. SA1材木列断面（西から）



5. SA1材木列断面（北西から）



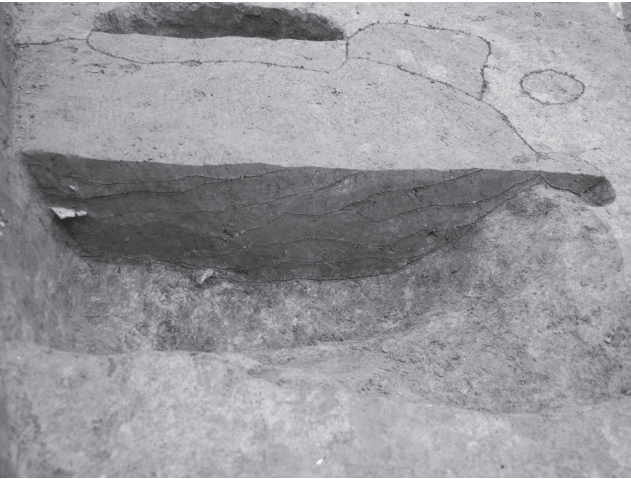
6. SK3断面（西から）



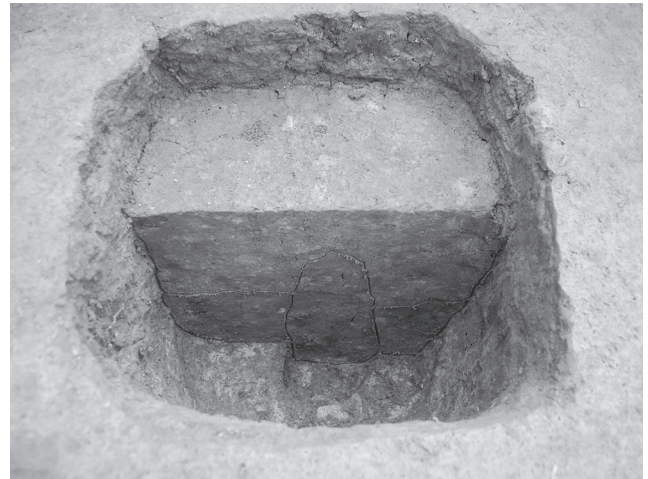
1. SK4(柱穴)断面(東から)



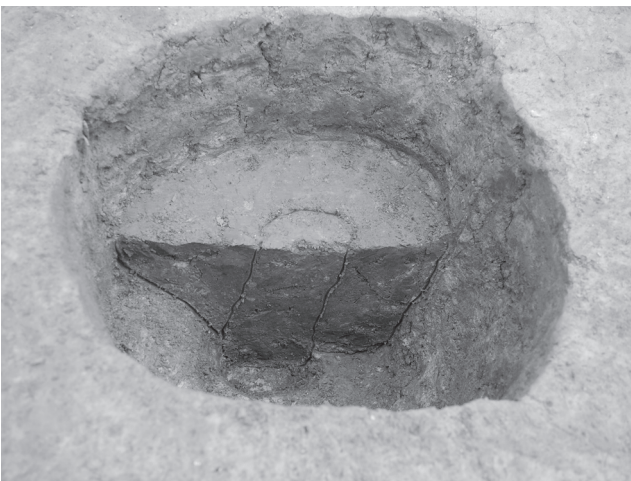
2. SK5・SK6(南から)



3. SK6断面(西から)



4. SK7(柱穴)断面(北西から)



5. SK8(柱穴)断面(北西から)



6. 調査区南壁断面(北東から)

第V章 総括

仙台市が作成した復興交付金事業計画に基づき、復興庁より東日本大震災復興交付金の交付を受け、平成23年3月から仙台市域における「震災復興民間文化財発掘調査助成事業」を行った。対象は、文化財保護法第93条の規定において、震災で特に大きな被害を受けた個人の専用住宅あるいは中小企業等の共同住宅等の再建事業に伴って必要とされた埋蔵文化財の事前発掘調査である。平成23年度・平成24年度の調査件数は、平成25年2月末で34件（18遺跡）である。調査地点のほとんどは、震災の津波浸水域（現海岸線から約4km遡上）よりも陸側にあり、古くから集落が形成されてきた自然堤防に立地する遺跡も多く、現代に受け継がれている。対象となった計画には、被災した場所での再建も多く、こうした地域の復興にとって、当事業の果たした役割は少なくなかったといえよう。

また、34件の発掘調査によって、弥生時代から近世にかけて遺構・遺物が検出され、新たな発見もあった。本書には、平成24年10月16日までにを行った調査のなかで、14件を報告した。その成果は、以下のようにまとめられる。

1 宮城野区内の調査

(1) 洞ノ口遺跡第20次調査

基本層IV層上面でSD1溝跡、土坑、ピットが検出され、基本層IV層と基本層IV'層が耕作土と考えられ、IV'層下面の基本層V層上面でSD2溝跡が検出されている。SD2は、堆積土が基本層IV'層に類似し、分層できないことから、基本層IV'層を耕作土とする遺構に伴う可能性があり、その時期は堆積土出土の須恵器坏から奈良時代以降である。そのため、遺構群の変遷は、基本層IV'層を耕作土とする生産域（奈良時代以降）⇒基本層IV層を耕作土とする生産域⇒基本層IV層上面の遺構（溝跡、土坑、ピット）によって構成される居住域、の3期に分けられる。

第20次調査区は、遺跡のなかでも標高のやや高い微高地に立地しており、周辺の遺跡南端部では、この調査区から北方・北西方にやや離れた第1次調査11区など（仙台市教育委員会2005a）で、基本層Vb層（平安時代前半の畑耕作土）⇒基本層Va層（平安時代後半の畑耕作土）⇒基本層Va層上面の遺構（平安時代の居住域）⇒基本層IVb層上面の遺構（中世前半の居住域）⇒基本層IVa層上面の遺構（中世後半の居住域）⇒基本層III層上面の遺構（近世前半の居住域）という変遷が明らかにされている。これに対して、第20次調査区周辺で行われた第14～18次調査（仙台市教育委員会2012a）では、中世を主として、居住域の存在を示す複数時期の遺構群は検出されていたが、生産域の存在は知られていなかった。その点で、今回の調査は、生産域から居住域への土地利用の変化と、その時期を平安時代も対象として考える必要性が指摘されたことで、今後、洞ノ口遺跡の微高地における遺構群全体の変遷を考えるうえで貴重な成果となった。

(2) 鴻ノ巣遺跡第15次・16次調査

第15次調査では、遺構群の変遷は、（古）SD3（北西-南東方向）⇒SD1（北東-南西方向）⇒SD2（北東-南西方向）⇒SK2⇒SX2⇒SK1⇒SX1（新）で、溝跡には二つの直交する方向性が認められる。時期は、SK2が奈良時代、SX1が10世紀初頭以前である。この調査は、北西側に位置する第6次調査（仙台市教育委員会1991）で古代～中世の上端幅2～3mの複数の溝跡（北西-南東方向）が検出されており、調査区がその延長に位置することから、何らかの区画施設の存在を確認する目的があった。しかし、第15次調査の溝跡SD1・SD2・SD3は、いずれも規模が小さく形態もそれらとは異なっており、SK1・SX1に想定される同方向の溝跡端部の可能性も今回の調査面積では判断できなかった。また、隣接する第16次調査では、上端幅2～3mの溝跡は検出されていない。

第15次・16次調査区は、遺跡の中央部に位置しており、これまでの調査で、古代～中世にかけての遺構・遺物が多く検出されている。第6次調査で検出された溝跡など、それらによって構成される居住域の区画施設を明らかにすることは課題であり、今後、周辺の調査成果をふまえながら検討していきたい。

なお、第6次調査で検出された古墳時代のVI層水田跡に関して、第15次調査VI層との対応が推定されている。

(3) 小鶴城跡第9次調査

小鶴城跡東部の丘陵裾部を巡る堀跡の一部を検出した。調査区は、遺跡の踏査やこれまでの調査で堀跡の存在が推定されていた位置にある。第9次調査区北方約25mに位置する第6次調査（仙台市教育委員会2012c）では、その延長で

ある堀跡（上端幅6.7m以上）が検出されており、遺跡南西部では、第4次調査（仙台市教育委員会2011）で丘陵裾部を巡る上端幅7.15m～7.30m、下端幅1.70m、深さ1.95mほどの堀跡が検出されており、同じ遺構と考えられる。

2 若林区内の調査

（1）南小泉遺跡第72～74次調査

遺跡中央部の第72次調査で古墳時代中期後半の堅穴住居跡3軒、堅穴遺構、土坑など、遺跡西部の第73次調査で近世～近代の土坑群など、第74次調査で古墳時代後期の土坑と、古代の堅穴住居跡1軒などが検出されている。

遺跡の中央部に位置する遠見塚古墳の周辺から西側一帯は、古くからの調査で、古墳時代中期から近世にかけての居住域の形成が明らかにされており、そのなかで、古墳時代後期の居住域については、6世紀末葉の住社式期までは認められるが、栗圀式期以降、7世紀初頭から8世紀初頭頃までは明瞭でなく、今回の各調査も同様の傾向にある。こうした集落の動向は、遺跡西部において、第74次調査でも出土している南小泉型関東系土器を組成し、区画溝を伴う居住域の出現と関係付けられており（第22次調査：仙台市教育委員会1994）、郡山遺跡や長町駅東遺跡などを含めて仙台平野における集落動態のなかで考えていく必要がある。

また、第72次調査の古墳時代中期後半：引田式期の堅穴住居跡にはカマドが付設されており、この時期以降、カマドが普及することが確認されている。

（2）養種園遺跡第9次調査

近世の南北方向の堀跡の一部を検出した。調査区は、これまでの調査や航空写真で、この堀跡の存在が推定されていた位置にある。堀跡の規模は、第1次調査IV区SD1（第9次調査区の北側30mの位置で検出された同じ遺構：仙台市教育委員会1997）で、上端幅20.81m、深さ3.58mであることが確認されている。

（3）沖野城跡第13次調査

沖野城跡に関連すると考えられる南北方向の溝跡1条（SD3：上端幅4.00m以上）を検出した。同様の南北方向の溝跡は、西側隣地（第8次調査：上端幅6.8m以上）、さらにその西側隣地（第9次調査：上端幅6.85m）でも検出されている（仙台市教育委員会2012b）。対象地周辺は、前述の『六郷村沖野館屋敷割図』を見ると、現在と同様、北辺に水路、南辺に道路があり、東西に長い土地を南北方向に屋敷割されており、一部、溝による区画も認められる。調査で検出された溝跡の方向は屋敷割の方向と類似しており、区画施設の可能性もある。

沖野城跡の調査では、これまで、東西あるいは南北方向の溝跡が検出されて、方形を基調とする区画の存在が明らかにされてきたが、区画内では建物跡は検出されておらず、遺物の出土もほとんどないことから、遺跡の実態については不明なところが多く、年代も、文献をもとに16世紀頃と推定されている状況にある。今後、発掘調査によって、こうした課題を明らかにしていきたい。

（4）北屋敷遺跡第5次調査

基本層Ⅶ層上面で古代以前の遺構（溝跡、土坑）、基本層Ⅳ層上面で近世の遺構（溝跡、土坑、性格不明遺構、ピット）を検出した。北屋敷遺跡は、これまでの調査で、古代、中世の遺物は数は少ないながら出土するが、主体は近世の居住域で、それを示す遺構・遺物が検出されており（仙台市教育委員会1979）、今回の調査でも、同様であった。しかし、古代以前に関しては、遺構の検出とともに、図示しえない破片資料ではあるが、古墳時代前期・平安時代の遺物が確認され、遺跡の年代・性格を考えるうえで貴重な成果となった。北屋敷遺跡の立地する自然堤防の南側、北側には可耕地となる後背湿地が広がっており、古代以前における集落の存在を考えていく必要がある。

3 太白区内の調査

（1）富沢館跡第3次調査

北西-南東方向の溝跡1条（SD1：上端幅3.5m）と、それより新しい土坑1基等を検出した。いずれも時期は不明であるが、SD1には館跡に関連する可能性もある。

富沢館跡は、館跡の主郭や、土塁の調査は行われていないが、土塁が良好に残存し、微地形から堀の位置も推定されるなど、仙台市域の平地にある館跡のなかで重要な遺跡である。

（2）郡山遺跡第224次・230次・232次調査

遺跡東部の第230次調査で近世以降の溝跡、遺跡西部の第232次調査でI期官衙に関わる区画施設（SA1材木列跡）、

古代以降の溝跡が検出された。第232次SA1材木列跡は新たな区画施設の発見であり、周辺では、南辺区画施設として第100次調査のSA272材木列跡（方向角：E-28°-S）、西辺区画施設として、第99次調査の重複するSD1429⇒SD1394⇒SA1430（方向角：N-33°-E）の3期変遷、第103次調査の平行するSD1492（方向角：N-30°-E）SD1509（方向角：N-33°-E）の存在が知られている（仙台市教育委員会2005b）。第232次SA1材木列跡は、検出長6.3m、方向角：E-36°-Sで、西辺と直交し、南辺と平行する区画施設と考えられる。しかし、それぞれの方向角にやや違いがあり、第232次SA1材木列跡と南辺SA272材木列跡との推定距離は、第232次調査地点からでは140m程であるが、この距離は一定しておらず、西方では長く、東方では短くなっていくと予測される。この第232次SA1材木列跡の機能については、区画内部の様相と、西辺の複数時期にわたる区画施設との関係をふまえながら考えていく必要がある。

郡山遺跡は、縄文時代後期から近世までの時期幅をもつが、遺跡全体に遺構が展開するのは、古墳時代後期の6世紀末葉に集落が形成されてから、7世紀中葉～8世紀初頭にⅠ期官衙、Ⅱ期官衙が機能していた時期までである。古墳時代中期や、奈良時代、平安時代にも地点的な土地利用は行われているが、大規模な集落の形成は確認されていない。その理由として、郡山遺跡とその周辺の微地形分類をみると（仙台市教育委員会1990）、旧河道が多く、名取川や広瀬川の本流の痕跡もあり、長期的には不安定な堆積環境にある土地と評価されていたためと考えられる。しかし、6世紀末葉～8世紀初頭の動向は、そうした広い土地が、当時、計画的な集落の形成、官衙の造営に適した土地資源と評価された可能性を示している。今後の課題としておきたい。

当事業は、平成25年度も継続して行われる予定である。東日本大震災からの復興と埋蔵文化財保護の両立をはかっていきたい。

引用・参考文献

- 仙台市教育委員会1979『北屋敷遺跡』仙台市文化財調査報告書第17集
仙台市教育委員会1981『鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第32集
仙台市教育委員会1990『郡山遺跡第84次・85次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第145集
仙台市教育委員会1991『鴻ノ巣遺跡第6次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第148集
仙台市教育委員会1994『南小泉遺跡第22次・23次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第192集
仙台市教育委員会1997『養種園遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第集
仙台市教育委員会2002a「北屋敷遺跡（第3次）」『小鶴城跡他』仙台市文化財調査報告書第261集
仙台市教育委員会2002b「富沢館跡」『小鶴城跡他』仙台市文化財調査報告書第261集
仙台市教育委員会2005a『洞ノ口遺跡』仙台市文化財調査報告書第281集
仙台市教育委員会2005b『郡山遺跡発掘調査報告書—総括編』仙台市文化財調査報告書第283集
仙台市教育委員会2009『養種園遺跡第2次・保春院前遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第344集
仙台市教育委員会2010a『沼向遺跡第4～34次調査』仙台市文化財調査報告書第360集
仙台市教育委員会2010b「沖野城跡第5次調査」『上野遺跡他』仙台市文化財調査報告書第372集
仙台市教育委員会2011「小鶴城跡第4次調査」『法領塚古墳他発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第393集
仙台市教育委員会2012a「洞ノ口遺跡第14～18次調査」『仙台平野の遺跡群22』仙台市文化財調査報告書第404集
仙台市教育委員会2012b「沖野城跡第6～11次調査」『仙台平野の遺跡群22』仙台市文化財調査報告書第404集
仙台市教育委員会2012c「小鶴城跡第6～7次調査」『仙台平野の遺跡群22』仙台市文化財調査報告書第404集
仙台市教育委員会2012d「郡山遺跡第206次調査」『郡山遺跡他発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第405集
宮城県教育委員会1981『硯沢・大沢窯跡ほか』宮城県文化財調査報告書第116集

報告書抄録

ふりがな	せんだいししんさいふつこうかんけいせいきはつちようさほうこく							
書名	仙台市震災復興関係遺跡発掘調査報告							
副書名	平成23年度・平成24年度震災復興民間文化財発掘調査助成事業に伴う発掘調査報告書							
巻次	I							
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第416集							
編著者名	水野一夫 小泉博文 佐藤高陽 橋本勇人 千葉悟 伊藤翔太 及川謙作 鈴木隆 斎野裕彦							
編集機関	仙台市教育委員会							
所在地	〒980-0811 仙台市青葉区一番町4丁目1-25東二番丁スクエア3階 Tel:022-214-8894							
発行年月日	平成25年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
	種別	市町村	遺跡番号					
要約								
こづるじょうあと 小鶴城跡 (9次)	せんだいしみやぎのくしんせんさんちようめ 仙台市宮城野区新田三丁目	4100	01194	38° 16' 48"	140° 55' 55"	2012.04.26	11.7㎡	記録保存 (個人住宅建築)
	城館	中世		溝跡1		土師器・陶器		
城跡に伴う堀跡1条を検出した。								
どうのくちいせき 洞ノ口遺跡 (20次)	せんだいしみやぎのくしんせんさんちようめ 仙台市宮城野区岩切字洞ノ口	4100	01372	38° 18' 10"	140° 57' 11"	2012.09.03 2012.09.05	25.8㎡	記録保存 (個人住宅建築)
	集落・城館・水田・屋敷	古墳～近世		溝跡3・土坑1・ピット3		土師器・須恵器		
古代～中世の溝跡2条、土坑1基、ピット3基を検出した。								
こうのすいせき 鴻ノ巣遺跡 (15次)	せんだいしみやぎのくしんせんさんちようめ 仙台市宮城野区岩切字鴻巣	4100	01034	38° 17' 54"	140° 57' 0"	2012.06.04 2012.06.06	16.1㎡	記録保存 (個人住宅建築)
	集落・屋敷・水田	弥生～中世		溝跡3・性格不明遺構2・土坑2		土師器		
古代～中世の溝跡3条、土坑2基、性格不明遺構2基を検出した。								
こうのすいせき 鴻ノ巣遺跡 (16次)	せんだいしみやぎのくしんせんさんちようめ 仙台市宮城野区岩切字鴻巣	4100	01034	38° 17' 55"	140° 57' 0"	2012.09.11	16.0㎡	記録保存 (個人住宅建築)
	集落・屋敷・水田	弥生～中世		溝跡3・ピット1		土師器		
溝跡4条を検出した。								
みなみこいずみいせき 南小泉遺跡 (72次)	せんだいしわかばやくとみみづかちちようめ 仙台市若林区遠見塚二丁目	4100	01021	38° 14' 21"	140° 54' 49"	2012.06.20 2012.06.29	29.4㎡	記録保存 (共同住宅建築)
	集落・屋敷	弥生～近世		竪穴住居跡、竪穴状遺構5・土坑3		土師器・土器		
古墳時代中期後半の竪穴住居3軒、土坑3基を検出した。他にSI1を切る住居と考えられる痕跡を確認した。								
みなみこいずみいせき 南小泉遺跡 (73次)	せんだいしわかばやくとみみづかちちようめ 仙台市若林区遠見塚二丁目	4100	01021	38° 14' 26"	140° 54' 27"	2012.07.26 2012.07.30	25.5㎡	記録保存 (個人住宅建築)
	集落	弥生～近世		溝跡1・土坑13		土師器・土器(火消壺)		
近世～近代の土坑12基、古代の溝跡1条、土坑1基を検出した。								
みなみこいずみいせき 南小泉遺跡 (74次)	せんだいしわかばやくとみみづかちちようめ 仙台市若林区遠見塚二丁目	4100	01021	38° 14' 25"	140° 54' 25"	2012.07.31 2012.08.08	36.3㎡	記録保存 (個人住宅建築)
	集落	弥生～近世		竪穴住居跡1、竪立柱跡1・土坑3、性格不明遺構1		土師器・須恵器		
古墳時代後期の土坑2基、古代の竪穴住居跡1軒を検出した。他に時期不明の土坑1基、柱穴2基、性格不明遺構1基を検出している。								
ようしゆえんいせき 養種園遺跡 (9次)	せんだいしわかばやくとみみづかちちようめ 仙台市若林区南小泉一丁目	4100	01349	38° 14' 34"	140° 54' 7"	2012.07.18	14.99㎡	記録保存 (個人住宅建築)
	集落・屋敷			溝跡1		なし		
第1次調査IV区に続く堀跡1条を検出した。								
きたやしきいせき 北屋敷遺跡 (5次)	せんだいしわかばやくとみみづかちちようめ 仙台市若林区六丁目の目中町	4100	01220	38° 15' 5"	140° 56' 24"	2012.07.30 2012.08.29	146.40㎡	記録保存 (共同住宅建築)
	集落	古代・中世・近世		溝跡9・土坑4・性格不明遺構1・ピット6		土師器・須恵器、中世陶器・近世陶器、瓦・木製品、石製品		
古代以前の溝跡2条、土坑1基、近世の溝跡7条、土坑3基、性格不明遺構1基などを検出した。								
おきのじょうあと 沖野城跡 (13次)	せんだいしわかばやくとみみづかちちようめ 仙台市若林区沖野七丁目	4100	01234	38° 13' 42"	140° 55' 6"	2012.06.04 2012.06.06	31.68㎡	記録保存 (個人住宅建築)
	城館	中世		溝跡3		須恵器		
城跡に伴う溝跡1条を検出した。								
とみざわたと 富沢館跡 (3次)	せんだいしいたいはくくとみざわあざやかた 仙台市太白区富沢字館	4100	01246	38° 12' 55"	140° 51' 43"	2012.05.28 2012.05.30	16.64㎡	記録保存 (個人住宅建築)
	城館	中世		溝跡1・土坑1・ピット		須恵器		
溝跡1条、土坑1基を検出した。								
こおりやまいせき 郡山遺跡 (224次)	せんだいしいたいはくくこおりやまさんちようめ 仙台市太白区郡山三丁目	4100	01003	38° 13' 28"	140° 53' 41"	2012.06.27	6.3㎡	記録保存 (個人住宅建築)
	官衙・社寺・包蔵地	縄文・弥生・古墳・奈良		なし		土師器		
遺構は検出されなかった。								
こおりやまいせき 郡山遺跡 (230次)	せんだいしいたいはくくこおりやまさんちようめ 仙台市太白区八本松二丁目	4100	01003	38° 13' 30"	140° 53' 43"	2012.09.06 2012.09.10	14.5㎡	記録保存 (個人住宅建築)
	官衙・社寺・包蔵地	縄文・弥生・古墳・奈良		溝跡1		陶器		
近世以降の溝跡1条を検出した。								
こおりやまいせき 郡山遺跡 (232次)	せんだいしいたいはくくこおりやまさんちようめ 仙台市太白区郡山二丁目	4100	01003	38° 13' 19"	140° 53' 22"	2012.09.20 2012.10.05	32.28㎡	記録保存 (個人住宅建築)
	官衙・社寺・包蔵地	縄文・弥生・古墳・奈良		木曜跡1・溝跡5・土坑3・柱穴・ピット4		土師器		
官衙跡に伴う区画施設(材木列跡)1条、溝跡4条、土坑2基などを検出した。								

仙台市文化財調査報告書第416集

仙台市震災復興関係遺跡発掘調査報告 I

— 平成23年度・平成24年度震災復興民間文財
発掘調査助成事業に伴う発掘調査報告書 —

2013年3月

発行 仙台市教育委員会
住所 仙台市青葉区一番町4丁目1-25
東二番丁スクエア3階
文化財課 TEL 022 (214) 8894

印刷 株式会社 東北プリント
仙台市青葉区立町24-24
TEL 022 (263) 1166
